ブルトンの騎士候補生

英国孝太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブルトンの騎士候補生

【Ｎコード】
Ｎ５３６７Ｖ

【作者名】
英国孝太郎

【あらすじ】
孤児から騎士へ、騎士から名門貴族へと成り上がる聖なる騎士物語。ヨーロッパ最後の騎士の国「フランス／ブルターニュ地方」でのロマンス。

騎士団の社交界アッパータウンで、騎士候補生となった主人公が、あの『アーサー王と円卓の騎士』の末裔たちと織りなす剣と魔法の聖剣伝説。騎士の宴あり、魔法あり。
１３歳の少女は騎士社会の存在を根底から揺るがす、黒き陰謀の渦

に巻き込まれる。

【改稿中】プロローグ

【東日本大震災で被災された皆様へ】
このたびの東日本大震災において、
お亡くなりになられた方々に対しまして心よりお悔やみ申し上げますとともに、
被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。

現在、プロローグは改稿中のためもうしばらくお待ちください。

【語句説明】
ＭＭＯＲＰＧ（マッシブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム）
一般的に「多人数同時参加型オンラインＲＰＧ」などと訳され、オンラインゲームの一種でコンピューターＲＰＧをモチーフとしたものを指す。
（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　フリー百科事典引用）

第1話　星読みの予言【1】

第1話

――ビクッと鳥肌が立つとともに、ナオミはわれに返った。
（今さっき自分は一瞬だけ夢をみていた、また新渡勇人（ニート・ユージン）という少年の夢を――）

今はまわりをみなくては。現実逃避をしちゃいけない。でもこの非現実的な光景を、どうやって受け入れたらいいのだろう。居候先の宿主の命令で、近くの森に水汲みに来ていた少女は、自分にそう言い聞かせた。

見上げる程の巨木に囲まれて、黒髪のボブカットが激しく揺れる。少女の銀の丸ぶち眼鏡には、この森では見慣れない異形な生き物が映っている。太古から生い茂る原始林のなかで白くて大きな何か。あれは白狼だ、まるで雪のように純白で美しい。

霧に包まれた森から逃げ出そうとする者に容赦なく鋭い牙が襲いかかる。獣、いや姿形からいっても魔獣と表現したほうが無難だ。なんたって大人を丸呑みできる程の巨体なんだから。

夜泣きふくろうの鳴き声に紛れて太い木の枝をバギッバギッ！と砕く音、ナオミの耳には悲鳴とと嫌な音が聞こえた。ヒトを味わうベチャグチャッという音を想像しただけでも身の毛がよだつ。

季節は十二月。吐く息は凍てつく寒さから白く濁り、外気を吸い込めば肺がにわかに痛い。きしゃな体のナオミにとって、色褪せたデニムのジーンズに糸のほつれたウールのカーディガン。そして毛糸のセーターと汚れた木綿のエプロンだけでは、真冬の早朝の寒さに身も心もとても耐えられない。

濃霧に包まれた大森林では、太陽の木漏れ日など目にすることはない。いつも早朝に水汲みにいく時間からして、おそらく今は――午前五時を少しまわったぐらいだろう。

それでもこの森は夜と変わらない程の漆黒の闇に包まれている。うっそうと生い茂る葦が、彼女のデニムのジーンズにまとわりつく。いかにも逃がさないぞと意志を持っているようだ。

ナオミの鼻に血のにおいがツーンッと届く。水汲みにきていた人間に数匹の獣が群がっている。身体の上に小山ができ、少し離れたところに泉ですれ違った男の首だけが、身体から分離して不思議そうにこちらを見つめていた。

ナオミは心が麻痺し、現実を呑みこめないでいる。（このカンペールの森に、こんな魔獣が生息しているなんて今まで耳にしたことは一度もないのだから）少女は逃げたくても、彼女の町へ通じている道を巨体が防いでいるため、逃げられない。

前には巨大な白狼が七匹。後ろには五匹、うち四匹はヒトを喰っている。ナオミは恐怖のあまり木陰のなかに身を潜め、前かがみに震えながらギュッと小さくなった。パキッと少女が踏んだ小枝に白い狼はピクッと耳をたてた。

ガルルルッーと狼どもの唸り声が聞こえ、白い吐息が見えた。ペチャッと涎が聞こえる。狼と自分を隔てているのはこの木陰だけだ。身体を動かせばパキッとまた小枝を踏んだ音がした。一瞬、白狼と目があった気がしないでもない。その目は血走っている。すでにナオミは目で噛み殺されたといってもよい。

（もう、だめだ!、こんな巨大な狼なんて今まで見たことない）

ナオミが瞳を閉じれば、狼は雄叫びをあげて、ナオミが身を潜めている木陰を飛び越える。すぐに「うわあああー！」という耳をつんざく悲鳴が木々の間を木霊した。またベチャグチャッとヒトを味わう嫌な音が聞こえてきた。

（獣と目が合ったのは、きっと気のせいだ。早くここから離れよう）

ナオミは恐るおそる瞳を開けると――その瞬間、目の前に一匹の巨大な白狼が少女を凝視している。その白き悪魔は唸り声をあげ、牙を剥きだす。牙を見たとたん、少女は恐怖のあまりに腰が抜けた。獣の口には先ほど喰らった、人の顔の残骸が残っている。白狼が大きく口を開けた瞬間、ナオミはぐっと瞳を閉じた。

同時にキャン、キャンッと狼の鳴き声が聞こえる。ナオミが白狼に目をやれば、狼は口に剣を突き刺されたらしく、巨木の根元で血泡を吹いて無残に死んでいた。

どこからか「おい、生きているか？」と低い声が少女に呼びかけた。濃霧のせいで声の場所が突き止められない。どうやら数歩先から声の主とその影が見える。こちらに近づいてくるようだ。ナオミは、怯えた目を細めながら恐る恐る声のする方向へ視線を向けた。

そこには、顔におぞましい刺青がはいっている男が立っている。左耳にはラインストーンの埋め込まれた象牙の飾りのピアスをしている。右手には宝飾が施されている剣を握り、刃には血がポタポタと滴れ落ちている。おそらくその剣で魔獣を殺したのだろう。身なりといえば、黒革の丈夫そうなフロックコート。そしてこの凍てつく寒さから顔を守るためにウールの黒いマフラーを巻いている。髪は焦げ茶に黒色の山高帽という黒一色の不気味な男だ。

その黒ずくめの男は「大丈夫か、お嬢ちゃん？」と再び少女に声をかけ、剣に付着した獣の血を持っていた布で拭い去ると黒革の鞘

におさめた。そしてナオミにそっと手を差しだした。少女は震える手で彼の大きな手を握りしめる。
「た、助けてくれてありがとう、おじさん。」
同時に恐怖のあまり、ナオミの頬からぽろぽろと涙がこぼれ落ちた。

ナオミは黒ずくめの男の後ろをみて、目を大きく見開いた。
男は少女の恐怖にせまった目をみて、警戒を怠らないように静かに振り返った。左耳のピアスの象牙の飾りの房が煌く。黒ずくめの男の後ろには、尋常ではない巨大な狼の十五匹の群れが唸り、待ち構えていた。魔獣の臨戦態勢だ。

あの嫌な音が、まだ聞こえてくる。ガツガツと嫌な音、ベチャグチャッとヒトを味わう音だ。
黒ずくめの男は外套を襲ってきた白狼の眼に被せ視覚を奪った。瞬時にあの剣で「獣の分際で俺様に勝てると思っているのか！身の程知らずがぁ」と、意気込みながら、二匹の狼を左右に切り捨て道を拓く。にぶい感触と生温いものががしぶいて少女の顔を汚している。
首筋を伝って、小さな胸に滴り落ちる感触にナオミは震えた。多勢に無勢だ。
「子連れだと不利だ、たしかすぐ近くに水汲み場があったな。助かりたければ、そこまでついて来い、あそこだと聖水の魔法が使える」
「聖水の魔法ってッ！」
ナオミは意味深な言葉に声を荒げた。

この男、荒くれ者の無頼漢のようだが、一体何者なんだろう？
相当な剣の使い手には間違いなさそうだ。一人で逃げるよりも、今はこの男の言うとおりにした方が助かるかもしれない。ナオミを

襲おうとした狼の死骸をみながら少女は思う。
「でもおじさんっ！私、腰が抜けて動けないのっ、置いていかないで、お願い！」
「これだからガキは嫌いなんだよ」と剣士は、剣を再び鞘におさめると、ナオミを背負い小走りに水汲み場として使われている泉へと、全速力で駆けだした。鼻先も牙も赤く染まっている獣の群れは、肉を食い尽くしあばら骨の塊となった残骸を捨て、生きている彼女たちを目がけて物凄い速さで追いかけてきた。
二人の背後から、木々がドッスン、ドスンとなぎ倒されるのが雄叫びとともに耳に入ってくる。濃霧によって視覚が遮られようが、魔獣には敏感な嗅覚がある。奴等が血眼になって追いかけてくるのが、否応なしに想像できる。迫り来る死の恐怖から少女は後ろを振り向くことができない。

陰鬱な木々の間に、ピカピカと宝石のように光り輝く絨毯のようなものが見えた。泉だ。それはまるで漆黒の夜に、航行する船舶へ存在をあかあかと照らし示す灯台のようだ。まさしく今のナオミにとって泉は灯台に等しい。
十三匹の魔獣に追い込まれながら、刺青の男は必死に泉へ水飛沫をあげて駆けこんだ。水はそれほど深くはない。小さな滝壺といった感じだ。膝まで水が浸かるなか男はぶつぶつと何やら呟きはじめた。濃霧のなかで、落葉樹の小さな木が目の前まで倒れ、十三匹の魔獣のうち一匹が口を大きく開けて襲いかかってきた。少女はこの男の命令に従った自分を哀れみ、人生を後悔した。
「もう、終わりだわ」
瞬間、泉全体に光の六芒星の円陣が現われ、ナオミたちを太陽のような光で包みこんだ。
なにか神々しい力を感じる。その薄いヴェールのような光は波打ち、ナオミの肌にまとわりつきながら天空へと昇っていった。襲いかかってきた獣は、その光に触れたとたん悲鳴をあげ、瞬時に灰と

なり森に散った。魔獣どもは、攻撃を一時的にやめ様子を見ている。少女は投げ捨てるように黒紳士の背中からおろされた。
「聖水の魔法陣、『守護聖人イヴの護り』だ！　お前は、そこにいろ！　魔獣どもは魔法陣には踏みこめん。いま泉は、守護聖人イヴが降臨している。フェンリルがそこに触れた途端、その汚れた魂とともに連中は聖人イヴの力により跡形もなく消滅する」

セイスイノマホウジン、シュゴセイジンイブノマモリ？　そういえば、今日はクリスマスイヴだけど、そのイブノマモリと何か関係が？　聖水の魔法ってコレなの？

巨大な白狼たちが泉のまわりをぐるぐるとまわること数分、殺気がナオミの肌にびんびんと伝わってくる。「退いてはくれないか。これではっきりしたよ。お前たちに科せられた任務ってのがな、狙いは俺か、それとも――」黒い剣士はナオミに目をやった。

狙いは私？　そんな馬鹿なことがあるもんか！

「私、狙われる理由なんてどこにもないわ！私は、ただ水汲みに来ただけなのに！」
ナオミは思わず声を荒げた。黒ずくめの男は少女の耳元で説き伏せるように囁いた。
「連中はフェンリル狼、北欧神話に登場する邪悪な神々の末裔。今は迷いの森に住みつく白い悪魔と呼ばれている白狼だ」

北欧神話に登場する邪悪な神々の末裔？

男は淡々と白き悪魔の知識をナオミに教えてくれる。
「フェンリル狼ってのは、野晴らしで生きているわけじゃない。飼い主に餌付けされて育つ。連中が厄介なのは精霊使いに命じられた

ことは、死ぬまで遂行する習性があるということだ。この森のどこかに飼い主である精霊使いがいるはず、そいつを半殺しにすれば全てがわかる。このわん公どもを手懐けるほどだ。相当のてだれに違いねえがな」

ナオミは怯えながら「精霊使い？」と男の言葉を繰り返した。男は苦笑しながら「一昔前までは魔道士と呼ばれ、自分の影に数十匹もの魔物を棲ませている連中のことだ。そいつが迷いの森からこの森へ、獣どもを魔法で呼び寄せたんだ」

セイレイツカイ。マドウシ。マホウ。

「奴らの目的が俺ならば逃げ道はない。戦わねばならんようだな。これは俺と運命との戦い。お前は一歩もここから出るな」と男は意味深に呟くと、狼の群れへと斬りこんだ。

ナオミの心は空っぽだった。銀の丸ぶち眼鏡に映る十二匹もの魔獣が現実として、まだ理解できていない。黒剣士は全身血まみれに狼をなぎ倒していく。まず手始めに獣の心臓を一撃で突き刺し三匹が秒殺された。

獣の親兄弟か、傍にいた三匹の獣が血眼のおぞましい形相で黒紳士に吼えながら突進してくる。

男を味わうというよりも食いちぎるような雰囲気だ。剣士は、このときぞばかりに後ろの魔法陣へ身を退いた。その三匹の魔獣は、光に激突し瞬時に風塵となり濃霧に消えた。

「愚か者め、戦いの際に感情をむき出しにするとはな。残り六匹だ」と男は少女にそう伝えると息があがったのか、白い息を吐きながら魔法陣の中でしばらく座り込んでいる。

鳥の鳴き声が聞こえる。原始林は濃霧に包まれながら、刻一刻と時が過ぎているのだが、ナオミには時間がとまっている様に思えた。早く夢なら、覚めてほしい。そう願うばかりだ。それにしてもあの

巨大な魔獣の群れを、一瞬で半分も始末するなんて、この男はなんて恐ろしいの。少女は獣と同時に男にも恐怖感を抱き始めた。

「おらぁよっと」、いきなり立ち上がると黒剣士は魔法陣から飛び出て、一匹の魔獣の前足を切りつけた。痛みと巨体の重荷に耐えられず獣が、前屈みに倒れると同時に原始林の木々もバギバギと倒れる。黒剣士は、すかさずその獣の脳天を鋭剣でぶち抜いた。獣の口から大量の血が噴出す。男はその返り血を浴びながら、その屍骸を踏み台に勢いよく跳躍し、濃霧の中へ消えていった。

数秒後、四匹の魔獣の雄たけびにちかい悲鳴が大森林に轟いた。あまりの轟音に鳥たちが驚愕し、その場を離れる。まるで悪魔たちの殺し合いによる唸り声のようだ。

しばらくして魔法陣に血生臭い男が、侵入してきた。ナオミは、思わずギョッとし後ずさりをした。あの黒紳士だ。返り血を浴びて、その殺気立った姿は人というよりも悪魔にちかいように思えた。

右ふくらはぎを深く噛まれ、膝をつく黒ずくめの男。かなり疲れている。

柄を握りなおし少女に告げた「あと一匹だ、返り血で奴等の鼻も判断不能になったおかげで殺りやすい」とつぶやくと再び魔法陣を後にした。

最後の狼が前屈みになって跳躍し頭を低く垂れるのを見てとり、「うおおお――おぉ！」と黒剣士は雄たけびをあげた。

この男にとってももう限界なのだろう。最後の一匹にむかって、うまく腹に滑り込むと剣を振り上げる。勢いあまって前のめりにと倒れつつも、剣は白い毛皮をざざと切り裂き、その首を見事に討ち落とした。主をなくした狼の身体は血の噴水だ。痙攣を起こしながらもがいている。立ち上がったと思えば躓く。まさに虫の息だ。首は体から離れようが――まだ意識はあるみたいだ。血泡を吹きつつも、その目玉はナオミにむけられていた。これは仲間を殺され、黒

き炎の憎しみが宿った恨みの眼だ。

男は、なえた手で再び柄を握りなおし、剣を地に突き立て体重をささえていた。声をあげて息をすれば肺が痛い、脇腹など焼けつくように痛い。「さっさとでるんだ！　一人で帰れるか？　魔獣は全部始末した。私は精霊使いを探しに行く。なぜそこまでして俺の命を狙うのか、その理由を知る必要があるからな」と男はナオミを睨み据えた。

サッサトデルンダ？　嫌だ。怖い、ここから一歩もでたくない。

「――さあ！」と語気強くいわれ、脅されるように殺戮の現場に足を踏みいれた瞬間、頭だけの白い狼は昆虫のように這うようにして、鋭き牙をむきだし、ナオミと男に喰らいついた。少女の意識が薄らいでいくなか、男の「しまった！」という声が聞こえてきた。

チィッ！　まだ首だけ生きていやがった。フェンリル狼の首は力尽きたのか、瞳に光がなくなると、二人を牙に挟んだまま動かなくなった。――ザクッ、近くの藪から土を踏む音が聞こえた。

森の木陰から現われた男の姿をみて、黒ずくめの男はそのまま狼の飢えた舌に顔を落とした。絶望のあまり顔をあげることができない。

「――謀られた、奴が獣の飼い主なのか？　牙に挟まれて体が動けん！　こんなに近くにいたなんて。気づけなかった」

いや待て、あの制服には見覚えがある、と男は朦朧とする意識のなかで思う。

そうだ、かつて私が着ていた制服、確かにそうだ。襟元に金の糸で刺繍された騎士団の紋章。あれは公国の最高権威「円卓の騎士団」の制服。そしてあの月文字（ルーン）のイニシャルに、大鷲の銀のカフスボタ

ン。あれは私の制服だ。まさかあの男が。
「――きさま！」黒ずくめの男は、顔を狼の牙に挟まれながら、声を荒げた。藪からでてきた謎の男は、ほくそ笑んでいる。どうやら刺青男と面識があるようだ。

「やはりきさまかぁっ！」

まさかお前とは思わなかった、刺青の男は腹の底から叫んだ。
間違いない、奴なら魔獣を召喚できても不思議じゃない。間近に足音が聞こえ、顔をあげた瞬間、不敵な笑みを浮かべ、謎の男は刺青の男に向けて拳銃を二発、「バァンッ！バァンッ！」容赦なく撃ちこんだ。銃弾をぶち込まれた男の頭から無言の血があふれ流れ、脳みその破片がナオミの顔にへばりついた。
殺しを終えた男は息が絶えたえの少女にも銃口を向けた。

オネガイ、タスケテ！　と擦れた声で命乞いしようとも、男は首を横にふる。
「怖い」と心の底から思った。死ぬのは怖い、他人に殺されるのはもっと怖い。誰かが男の声をつかって「運命を変えてみせろ、ヒトの子よ」と呟いたようにも思えたが、きっと気のせいだろう。

ああ、意識が遠のく。これが死ぬってことかな。これでお別れだね、サヨナラ。
薄れゆく意識のなか「ドンッ！」と鈍い音ともにカンペールの森で、羽を休めていた青い鳥の群れは羽ばたいた。そのうち一匹は古き都ヴァンヌの方角へ飛び去った。

第2話　星読みの予言【2】

第2話

迫りくる死の恐怖に怯えてナオミは、ベットから飛び起きた！！

拳銃で撃たれた体の部分を恐る恐る触ってみても、銃傷はない。痛くもない。少女は自分の右掌を握りしめながら、「またなの。これで五回目、いい加減にしてよ。まったく嫌な夢だわッ！」と声を大にした。そして鳥肌の立っている腕をさすりながら、身体に弾丸がぶち込まれていないことを再確認し、改めて生きていることを実感している。

最近になってよくみる光景なのだが、しょせん夢は夢でしかない。ただナオミは、どうもそれがただの悪夢には思えなかった。ここ最近、自分は「夢の中でさらに夢」をみている。

埃臭いマホガニーの粗末な造りのベットから、少女は、仰向けに低い天井をぼぉーと眺めては物思いにふけっている。薄暗いなか手探りで近くに置いてある丸い眼鏡を探しながら。

新渡勇人（ニト・ユージン）という自分と同じ姓の、生意気そうな少年の夢を何度もみるのだ。その内容は変わっている。なんたって二〇一一年、ずっと先の、そう日本という国の未来の出来事なのだから。なんだか変てこな気分だ。

（えっと何だっけ？　僕はデブじゃない、ぽっちゃりだっけ？）

寝不足と疲労のなか、丸い眼鏡をかけると少女は、薄い毛布に小さな顔をうずめた。すでに忘れつつある悪夢を、なんとか記憶にとどめようとしていた矢先、屋根裏部屋のドアが「ミシッ」ときしんだ。足音が聞こえる。ナオミがドアの外に耳をすませば、ドシドシと誰かが少女の部屋に勢いよくあがってくるようだ。

十九世紀中期に起きた産業革命は、全ヨーロッパの人々に英知と技術を与え、魔法の時代から油の時代へと思想を変化させた。とりわけ蒸気機関の発明は、人々の生活様式さえも１８０度も方向転換させ、新しい社会へと向かわせた。だがフランス西部、ブルターニュ地方のフィニステール県南部にあっては、産業革命の風なんて、あたかも関係ないように相変わらず古い時代のままだ。オデ川下流の美しい小さな町カンペールも例外ではない。

今日はクリスマスイヴとあって、この町も少しばかりにぎやかになる。町に一歩、足を踏みいれてみれば、花崗岩でできた古い家並みがとても美しいこと。車の乗り入れが禁止された市街地には、中世の面影を残す美しい家並みが続いており、眺めているだけでも楽しくなってしまう。

去年の今頃はそっと耳を澄ませば、ある大きな家の広い庭ではキャッキャッと子どもたちの遊び声が聞こえてきたものだ。大聖堂の荘厳な尖塔を望むレオン通りや食料品店、パン屋が並ぶフレロン通りといった商店街通りは、そぞろ歩きにはぴったりの散歩道だ。町のバター広場をすぎて、ゆっくりと目にはいるのはサン・コランタン大聖堂だ。

町の交差点、目抜き通りには古びた旅籠がある。カンペールで二軒しかない旅籠のうちの一軒、ジジ亭だ。

「ポッポー、ポッポー」とジジ亭の鳩時計の音が聞こえてくる。外に通じる一階の廊下のゼンマイ式の壁掛け時計だ。銀素材で作られており、形は細長く天辺には深緑のタイル屋根があしらわれている。時計の下部の外装には、フランスのどこかわからないが、数名の騎士と尖塔のある美しい城、そして城下町が高浮き彫り細工であしらわれており、とても見事な職人技といえる。黒いアラビア数字が刻まれた白い大理石の文字盤には、数字に寄り添うように金の唐草文様装飾とグリーンのエナメル加工が施されている。そこから文

字盤の真ん中へ視線を移すと時間の番人が住む丸い巣穴がある。鳴き音の回数から判断して、

今は――午前四時三十分。

町の人々の多くがまだ眠りから覚める前、旅籠の屋根裏部屋の埃くさいベッドのなかで、ナオミは目に強い酸味、痛みを感じて目を覚ましていた。鳩の鳴き声を耳にして慌てて何度も瞬きをしてようやく深い息をした。

いつもどおりドシドシと足音が近づいてくる。勢いよく屋根裏部屋に通じている扉が開くと同時に「おい、野良！　いつまで寝てるんだい！　この居候娘！」とつっけんどんな鋭い声がした。

声の主は、宿の女将ヤドリギだ。人相といえば、肌は青白く顔はごぼうのように細長い。茶色い目は吊り上がっており、鼻は鉤鼻だ。髪は、銀髪で高く高く編み上げ、まるで玉ねぎのようだ。見るからにケチで性悪そうな女に見える。

服装は細長い深緑のレースの模様が入った絹のスカートに、襞の付いた白いブラウスに革仕立ての前掛けをしている。革靴は黒エナメル仕立ての花柄。すっきりとした長身だが、性格がにじみ出ているせいなのか、キリキリした感じが歪めない。左の薬指にはめたルビーとダイヤモンドの結婚指輪が、女の虚栄心を強調させる。

ナオミは目をつぶって、眠っているふりをした。

「さっさと水をくんでこないかッ！何時だと思っているんだい！」

ヤドリギ夫人はナオミの体を、おもいっきり蹴り飛ばしながら言い放った。

「ごほッ、もう起きています。奥様」しぶしぶナオミは寝返りをうった。

これも起きる時間を一分でものばそうという彼女の作戦だ。でも

夫人がパッとうすい毛布をはらいのけたので、ナオミが生まれた頃から枕のかわりにしてあるダックスフンド、彼女はこれをジョジョと呼んでいるのだが、彼を抱いて寝ていたナオミもさすがに寝床からはね起きた。

そういつもなら、午前四時には起きて身支度をしていなければいけない。

ナオミはヤドリギ夫人のまえに寝起き顔でたった。

「今度、寝坊したら朝飯ぬきだからね。この野良犬め！」

間髪入れずに夫人の右手がナオミにとび、ナオミは小さな声でうめいた。

「お前は孤児、私たち親子がしかたなく育ててやっているんだ！」

そんなこと耳にタコができるほど聞かされている。

自分は孤児、身寄りのない親なしだ。父の遠縁のヤドリギがどんな理由でか知らないけれど、親に捨てられた自分を嫌々ながら引き取ってくれた。当然、ここで住まわせてもらっているかわりに働くことが条件なのだが。

「帰りにいつものパンを買ってくるんだ。ほらっ、十フラン銀貨だ」

ナオミは何もいわずにお金を受けとると、とても憂鬱そうにのろのろと起きあがり、どんよりとした暗い気持をおさえ、寒さに震えながら仕事着へと着替えた。すじばった細長い足というか、膝小僧が目立ってきている足を色褪せたデニムのジーンズにとおし、毛糸のボロいセーターのうえに糸のほつれたウールのカーディガンを羽織った。そしてお世辞にも、きれいとはいえない古びた木綿のエプロンを掛けた。おかみから受け取った銀貨は、エプロンの小さなポケットのなかにさっと忍ばせた。

その頃、旅籠の主人ヤドリギといえば一階の寝室で大あくびだ。うーんと背筋をのばし「ボキボキ」と背骨を鳴らせて気持ちを整えている。その息子ハレルヤは、そんな親父を蹴飛ばして、「ぐぅーぐぅー」と鼻詰まりのようなイビキをかきながらまだ寝ていた。この肥満児は、ナオミと同じ年にしては、なんと恵まれた境遇だ。いやこの少女が悲惨な私生活を送っているだけなのだろう。

ナオミはもじゃもじゃの栗色の髪をなでつけると、どことなくあどけない顔をゴシゴシこすった。ああ、そうだ。今日はジョジョ・ダックスフンドを連れて行こう。突然、女将の怒鳴り声が聞こえてきた。「さっさといきな！　この親なし、ろくでなし！」

少女は逃げるように、一目散に階段を下り炊事場に置いていた桶をひっさげると外に出た。外気は凍てつき、肌がピリピリして痛くあまりの寒さに手がかじんだ。空にはひとつの星もなく、まだ真っ暗だった。

第3話　星読みの予言【3】

第3話

カンペールの西はずれには、人の手が一度も入ったことのない大森林がある。

年中霧につつまれた陰気な森だ。足を踏み入れれば夜泣きふくろうやカッコーの鳴き声が、不気味に恐怖心を駆り立てるかのように、朝方になっても聞こえてくる。

太古からうっそうと生い茂る奇妙な草花、なかでも圧倒的な存在感を放つのは、陰鬱な空気をかもし出している巨木の数々だ。落葉樹のオークをはじめ、樫やカシワといったブナの巨大な木々、その太さと高さともに、ゆうに4階建てのオランダ型風車並みだ。森全体がひとつの共同体であり、まるであの旧約聖書のバベルの塔のような威圧感がある。よそ者に恐ろしい巨人族が住んでいると法螺（うそ）を吹聴しても、一発で信じてしまう程の因習深き原始林。その本格的な冬がはじまりつつあるカンペールの十二月は、いやはや肌寒いどころではない。

最近のナオミの朝の始まりは、朝食の前にこの森の泉に水を汲みにいくことだ。

しかも朝夕と日課、というのもジジ亭を含めたカンペールの一部区域で、水道管が冬の寒さのために破裂してしまったためだ。水道管修復の工事はあと二週間ほどかかる。それまで彼女が森の泉に水汲みにいくことがヤドリギ家一同の総意として取り決められた。もちろんナオミには発言する権利さえも与えられていない。クリスマス前夜祭といっても、彼女の日課はなにも変わらないのだ。

ナオミが行かねばならない森は墓地をぬけたところにある。そこ

は夢にもでてきた場所。およそ四半世紀前までは、カンペールの人々の生活用水は、この森の天然水に依存していた。今では水道管が彼らの生命線なのだが・・・・。

「このあたりって幽霊がでるらしいよ」と墓石で羽を休めながら、こちらを凝視している数羽の気色悪いカラスにジョジョがキッとメンチをきりながら、少女に呟いた。

「はいはい、聞き飽きましたよ。耳たれダックスフンドちゃん」

少女は墓地が怖いのか、早足で通り抜けようとしている。

ジョジョ・ダックスフンド、この黒色のミニチュア・ダックスフンドとナオミは小さいときから一緒にいるせいか、二人だけの会話ができる。

冬の水汲み、いや水汲みそれ自体、おそらく十二歳の女の子にとってきつい仕事であり、かわってくれるものならかわってほしいぐらいなほど、かなり骨の折れる仕事だ。そうこれは男の人の仕事なのだ。ナオミは弱音こそはかないが、両手両足は血豆だらけでカサカサ、いつも血がにじみでていた。しかも冬の季節は、たださえ炊事と洗濯に慢性的なしもやけに悩まされているというのに。

墓地を通り抜けてほどなく森に入ったとき、水汲みにきている男の人とすれ違った。

一瞬、ナオミの脳裏に衝撃が奔った。

あの人は、どこかで見覚えがある。そうだ、夢の人だ。夢のなかで白い狼に食べられていた人だ。ナオミは、理由なくいきなり足が震え出した。本能なのだろうか、理性で抑えようとしてもガクガクと両足が震えてとまらない。少女は、濃霧の中で立ち往生したまま、固まってしまった。

そのとき彼女の背後から、バサササーと鳥の群れが羽ばたいた。

「きゃぁああ！、噛み殺さないで！お願いだからぁ！」
思わず顔を両手で覆って、ナオミは座り込んでしまった。

「どうしたのさ？ただの鳥だよ」
ジョジョは怯えるナオミのカーディガンの袖を噛み、前へ行こうよと促している。

数分が過ぎた。相変わらず森は静かで重苦しい濃霧が立ち込めている。死ぬべき男性は、無事に森を抜け出たのだろう。悲鳴が聞こえてこない。

（そうよ、所詮、ただの夢じゃない。第一、あんな巨大な白い狼なんてこの世にいるはずがないわ）
少女は、気を取り直して目指すべき場所へ向かった。
泉は坂を下ったところに湧きでていたため、行きはそれほどでもないが、帰りは木の桶に水を汲んでいるわけだから、これが一仕事なのだ。なれないうちは何度も転んで泣きながらやり直したものだ。今だって転んでやり直すことはしばしば。
水汲みが遅ければ、ヤドリギ夫妻の罵倒とせっかんが待っていた。
夫妻がなぜ自分を虐めるのかはわからない。ヤドリギは「さっさと白状するんだ！」というが、一体全体、自分は何を白状すればいいんだろう？　一度、彼らの虐めがやむものならと、あのことを白状したことがある。

そう、あの魔法のことだ――町のはずれに住んでいる、ダ・カーポという知り合いの魔女にヤドリギ夫妻を呪い殺す呪文を教えてもらい、日々練習中だと白状したら、往復ビンタが容赦なく少女の頬にとんだ。こんな奴隷のような生活が嫌で逃げだしても、口ではでていけと口汚く罵られても、何度も連れ戻される始末。きっとヤドリギはナオミから何かの秘密を聞きだすため、彼女をそばにおいて

いるのだ――でもそんな秘密などナオミは知らない。

以来、少女は黙って彼らの虐めに耐え忍んでいた。

ナオミはこのような夫婦の間で洗濯や掃除、使い走りなどにこき使われ、ひ弱い体をぼろ雑巾のようにくたくたにしていた。そんな野良犬のような姿からつけられた名前が野良、だがこの家でナオミの存在は野良犬どころか、犬の糞扱いだった。

耳を澄ませば聞こえてくる、森ふくろうの鳴き声に、ふと我に返えると少女と犬一匹は、泉にたどり着いていた。森の中では濃霧が太陽の光を遮断している。しかし水汲み場は、水の純度が高いせいか、暗闇の中でキラキラと輝いている。まるでダイヤモンドを散りばめた純白の絹のウェディングドレスのようだ。霧のなか地下水が地表に自然に出てきた水は凍ることなく、小川をつくり森に生命を吹き込んでいた。

少女は両膝を湿った地面について、利き手を支えに上体をかたむけた。

「よいしょっと！」と自分の体と同じぐらいの桶を水のなかにいれた。

ガッ、ポッと桶が冷水に浸かった鈍い音がする。

そのとき胸ポケットから十フラン銀貨が、静かに泉に浸水するようにすべり落ちた。目の前の仕事をこなすだけで精一杯のナオミは、銀貨が落ちたことなど気づかず、水がたっぷりとはいった桶を力いっぱいひきあげ、その場にしゃがみこんだ。ピチャッと桶の水が少女の頬にはねた。

「うひゃあ、冷たい！」

大きく息を吸いこんで一休みすると、両手で水が溢れださんとばかりの桶をもったものの、数歩ほど歩いては休み、歩いては休みの繰り返しだ。

白くて細い腕は重い桶にひっぱられ、ガチガチになった。
あかぎれの手からは、たえず血がにじみでていた。ナオミはあえぎ、肩で苦しそうに白い息を吐いた。すすり泣きがこみあげ、喉が思わずつまった。
「ああ、そんな！」
道が悪かったのだろう、昨夜から積もった新雪でナオミは転んでしまった。服もびしょぬれのなか、少女は黙々とくみ直しのため泉にむかった。ときどき口に両手をあて、温めながら瞳にうっすらと涙をためながら、少女を水を汲むのだ。

坂を登りきったと思いきや、霜により道がぬかるんでいたため、ゴロンッと勢いよく転んでしまった。今日はなんて運がついてないのだろうと唇を噛みしめて、木の桶をみた。だが水はこぼれていない。一本の太い手が桶の柄を握っていたからだ。
少女は頭を上げた。
「手伝おう」
黒ずくめの男の低くて太い声。
ナオミは雷が身体に走ったように身の毛がだった。明らかに恐怖ゆえである。その声は、聞き覚えのある嫌な声だ。見知らぬ紳士、（いや夢の中で知っているから「見知らぬ」とは言えない。相手が知らなくても私は知っている）が桶の柄をしっかりと持ってくれていた。
「一人でもって歩けます」
ナオミは心にもないことをいった。
少女は、夢にでてきた「あの男」なのかを確認するため、男の形相を注視した。やはりそうだ。一度見たら忘れられない、あのおぞましい刺青。左耳に象牙のピアスをしている。
あの魔法を使う男だ。この男は何者なんだろう？彼の目的は一体

なんなの？

よほどの物好きなのか、少女がお礼をいい、木の桶を受け取ろうとしても男はそれを拒み、自分が運ぶといいはる。少女のあかぎれの両手をみ、麗しいほどの大きな瞳、カサカサの唇をみて紳士はウールの黒いマフラーに深く顔をうずめた。

「おじさん、どうして手伝ってくれるの？」

紳士のかわりに「きっと誘拐するつもりだよ」

ジョジョがナオミの恐怖心を呟いた。

「道に迷ってしまってね、カンペールに行く途中なんだが、森に迷いこんでしまったんだ。もしかしてお嬢ちゃん、君はカンペールから来たのかね？」

信用してもいいのだろうか、夢のなかでは、味方ではなかったけど敵でもなかった。

今はこの男を町まで案内すべきだ。だってこの黒紳士は強い、なにかあったらきっと夢のように護ってくれるはず。

「ええそうよ、あたしは今からカンペールに戻るの。ついでだから町まで案内しますわ、ムッシュ」

ナオミは怖がりながら、黒ずくめの男にいった。

「ああ、それは助かる。で、これはどこにもっていけばいいんだ？」

「ジジ亭、町の古い旅籠です」

「それはちょうどいい。私は今夜、そこに泊まる予定だったんだよ。いやジジ亭に会わなきゃならん人がいてね、部屋は空いているかね？」

「ええ、たくさん！」

ナオミは目のまえの男がジジ亭の泊まり客とわかって一安心だ。

ジョジョは（いいかい？　油断しちゃだめだぞ、人さらいかもしれないから）とボソボソ。

ダックスフンドの忠告、まさにそのとおりだ。きっとヤドリギの友人か何かに違いない。それなら尚更、油断大敵だ。悪い魔法使いかもしれない。木の桶を返してといっても、これは女の子の仕事じゃないよ、と入り口まで自分が運ぶといいはる。こんな変わったお客は初めてだ。

男と森を歩くなか、ナオミはふと今朝見た夢を詳細に思いだしていた。

この人は白い狼から自分を護ってくれる、例の黒ずくめの男の人に間違ないわ。黒革の丈夫そうなフロックコートにウールの黒いマフラー、焦げ茶の髪に黒い山高帽の黒一色。やはり今日が運命の執行日――ナオミはそう思うと震えあがった。

突然、ジョジョが何かの気配を感じた。

「ねえ、あそこに大きな狼の群れがいるよ、ヤバイよ」とジョジョ。

「……！」

やはり、そうだ。夢は今、現実のものとなろうとしている。

どうしよう！　どうすればいいんだろう！　再び膝がガクガクと震えだした。

刺青の黒紳士は魔法が使える。だが夢では精霊使いとやらに殺された。こうなればこの人が戦っているうちに逃げるしかない。私も精霊使いに銃で頭をぶち抜かれるのは、御免だ。ひ弱な自分が助かる方法はそれしかない。そう思うと、緊張しておしっこがしたくなってきた。

ジョジョが狼の群れにむかって吠えれば、狼たちも吼え返した。

「おじさん、あそこに迷いの森のフェンリルがいるの！」

やはり間違いない、今日は運命の執行日なのだ。

男に背をむけ、ナオミはいつでも逃げる準備ができている。黒ずくめの男は少女がなぜフェンリルを知っているのか、疑問に思いつ

つも、外套から剣をとりだし勢いよく地面にしゃがみ込み、ザクッと剣を大地に突きさした。
呪文を唱えると剣の柄にあしらわれている宝飾がにぶく光り、耳をつんざく音とともに空間が大きく歪んだ。目が回るぐらいの速さで周りの景色が黒ずくめの男を中心に回転していく。

間髪いれず、悪夢のような白い狼たちが、濃霧に影を映しながら物凄い速さで襲い掛かってきた。
バギィ、バギバギッと小さな木が、なぎ倒される音が聞こえる。狼どもの血に飢えた牙を見た瞬間、ナオミは腰が抜け逃げるどころではない。やはり影を見るだけでも巨大な狼だ。木が砕かれる音がだんだん大きくなっていく。
「確実に喰い殺される！」と少女の頬からは大粒の涙が流れてきた。
そして死の悪寒から全身蒼白になった。ジョジョは死んだふりをしている。
「もうだめだ。やっぱり正夢だったのね」と少女が目を閉じた瞬間、白い悪魔たちはナオミの三歩手前で何かに遮られ、前に進めないようだ。不気味な唸り声だけが、大森林を一人歩きしている。獣どもの生臭い吐息が、少女の顔へと吹きかけられた。
「守護聖人イヴの封印だ」

シュゴセイジンイブノフウイン？

「聖人イブがこの地に降臨し、俺たちの盾となってくれている」と凛とした黒い男の声。

不思議だ、夢ではイブノマモリだったのに。

男が「聖人イブの許により汝らをこの地に封ずる」と呪文を終わらせれば、空間の歪みは狭まり、獰猛な狼たちを丸い水晶のように

濃霧とともに包み込み、狼の群れは地面に沈んだ。逃げる機会を失ったものの、どうやら命は助かったようだ。

す、すごい！　やっぱりこの人は強い。

ダ・カーポの影響もあって、ナオミは魔法を信じている。多少のことでは驚かない。でもこんなすごい魔法を実際に目にしたのは初めてだ。興奮とともに驚きを隠せない。だがこれは列記とした現実、目の前子で起こっている確かなる事実。決して夢ではない。

白き狼が封ずられてまもなく、森に隠れていた男は舌打ちとともに姿を消した。

こうしてカンペールの森は何もなかったように静けさを取りもどした。魔獣は千年、この森の守護精霊（ガーディアン）となるだろうと男はいった。だから今の時代にあってもカンペールの森に夜々、狼の遠吠えが聞こえてくるのはこのせいである。

「君のおかげで助かった、あと三秒遅ければ――」

いうもおよばず、悪夢と同じような現実になっていただろう。

着実にナオミの運命はかわりつつあった。何事も問題がわかれば対応はできよう。問題なのは、多くの人々がその問題そのものがわからないという点。確かにナオミは違った。悪夢を現実のものにしまいと犬を連れてきた。それがちょっぴり人の行動を変えた。小さな行動の連続が人々のつながりを生み、運命を変えるうねりとなった。そして彼女の新しい運命の歯車は今、小さな音をたててまわった。

「フェンリルを知っているということは、君はブルトン人か？」

キミハブルトンジンカ？　ブルトンジンッテナニ？　あの狼は夢でみただけだよ。

でもここは素直に「うん」と頷いておくのがいいかもしれない。大人の世界、子どもには分からないのだから。

町の教会が見えはじめた頃、ナオミはジョジョに狼と何を話していたのか尋ねた。

「同族は喰う趣味はない、お前だけ生かしてやろう」と狼たちがほざいていたそうだが、イヌ科であるだけで仲間と呼ばれ、生かしてくれるなら食物連鎖は成り立たない。

それにジョジョはどこからみてもかわいい黒色のミニチュア・ダックスフンド。あのおぞましい白き獣とは似ても似つかない。とっても小さい、真っ黒黒すけの臆病者のチビだ。「へん、そんなこと知ってらあ」ジョジョは舌をだらーんと垂らしている。原始林にいた青い鳥は「ヒトの子の運命は開かれた」と囁き、彼方へ飛び去った。

第４話　父の友人【１】

――午前六時三十分。

そろそろサン・コランタン大聖堂の鐘楼から美しい音色が鳴り、町が息を吹き返す頃だ。

カンペールの人々は、大聖堂から聞こえてくる時間を基準に生活をしている。少女と謎の黒紳士、そして犬は、無事に町の交差点にたどり着いた。町の通路は石畳で舗装されている。目指すべき場所は目抜き通りの古びた旅籠「ジジ亭」。

ジジ亭の外観は、赤いレンガのタイル張り。屋根は黒い瓦で葺いている。

三階建ての建造物で、一階と二階は宿泊用みたいだ。形は焼き菓子のカステラによく似ている。中二階部分に赤茶色のペンキで薄い灰色の木製看板に「宿屋」と書いてある。三角屋根の三階部分は家人の物置小屋か、なにかの用途として使われているようだ。一階と二階の窓は綺麗なガラス窓に金箔の窓枠にたいして、三階の窓はひどく汚れており窓枠も塗装が剥離してボロボロだ。

本当に窓なのか疑うほどだ。旅籠の出入り口には大理石を加工した円柱に屋根がついており、蔦がびっしりと生い茂りその一部が扉の下部にまで覆い被さっていた。扉といえば堅固な赤茶色のマホガニー製の両開き戸である。扉の淵は黒色の鋼鉄で補強されており、ヤドリギ家の家紋らしき紋様が左右に二分される場所に刻印されている。手前には青銅製の獅子頭に似せた訪問客用のドアベルが備え付けてあるという具合だ。

カランッ！キャランッ！　とナオミはジジ亭のドアベルをかじかんだ手で何度も鳴らしたが、誰もでてこない。少女は、黒紳士に水桶を玄関においてもらいお礼をいった。
「ありがとう、おじさん！」
「こちらこそ助かったよ、お嬢ちゃん」
ドアベルを何回か鳴らしてみたが、ジジ亭の者は誰も出てこない。いやはやなにか起きたのだろうか。彼女は、ゼンマイ式の壁掛け時計の前を通り、黒いお客をなかに案内した。家人用の暖炉の間を横切ると暖炉に薪をくべてあるらしく、その部屋はほんのり暖かい。ヤドリギ家の者はそこにみな勢ぞろいしていた。どうやら彼らにはドアベルが聞こえていなかったみたいだ。

部屋の内装といえば、赤いラシャの厚手のペルシャ風の絨毯が敷かれている。
建物全体にもいえることだが外装の厳めしい様子と違い、天井面と壁面は明るいオークによる板張りだ。暖炉の真上には、立派な角の雄鹿の剥製がかかっている。クリスタルガラス製の小さなシャンデリアがなんとも華麗だ。部屋には、三脚の背椅子と円いオーク製の食卓そして木製の黒いポールハンガー。暖炉の傍に置かれている一人掛けの革仕立てのソファと来客用の同じソファがもう一脚。大きな古い木製のキャビネットが一つに、数冊の書籍と共に縦長い書棚がおいてある。そのなかに小さな赤いラジオを確認ができる。

ジジ亭の主人ヤドリギは、草花の浮き彫り細工があしらわれている濃茶色の本革のソファにもたれて片足を組んでいた。湯気の立つスープをふぅふぅとすすりながら朝のラジオを聞き、朝刊をぼんやりと読んでいる。夫人は隣の台所で宿泊客の朝食の支度でてんやわんやと大慌て。
暖炉の間から一人息子のハレルヤは、台所に近い木製の食卓用の背椅子に腰を掛けその様子を愉快に眺めていた。短足なのか両足を

床の一歩手前でぶらぶらさせる。ときおり目をこすりながら食卓においてある熱い牛乳を陶器のマグカップにとうとうと注いでいる。

その姿形はジジ亭の主人のミニチュア版といえば、たった一言で片付く。

ハレルヤ坊やは、十二歳だというのにヤドリギにそっくりだ。脂ぎったテカテカの黒い髪につぶらな青い瞳、でかい鼻の豚面は小ヤドリギ、いや彼はまるでしゃべるブタのようだ。それゆえに父親であるヤドリギの形相をここで語るのは控える。ただ違うのは息子と違い、丈夫なツイードの紳士服を身に着けている点だけだ。生地は上品というより機能的でおおらかな感じがする。本人いわく毛織物の名産地である英国スコットランドからの輸入品らしい。少女には宿泊客の忘れ物か、ただの中古を質屋で購入したようにしか思えない。

よくハレルヤの友だちのお母さんたちは、小ヤドリギを「さすが名門のお家柄のお子さんだわ、とても賢そうな顔をしているわ」と褒める。だがナオミはどこからみても小ブタ、体よく言えばイベリコブタにしか見えなかった。

ナオミは自分がそこにいることを知らせるためにも、恐る恐るドアをかるくノックした。

犬の糞扱いを、誰もこの家では家族の一員とは認めていなかった。これはヤドリギの弟や妹、それから父や母といった親戚全員がそうだった。いわゆる一族の掟みたいなものだ。こんな自分の立場を不思議に思ってその昔、ナオミも「なぜ私にはお父さんとお母さんがいないの」と質問したことがあった。

「そんなこと、あたしが知るもんか！」これが夫人の答えで、ヤドリギの答えは「お前は犬の糞なんだぞ！」だった。最後にハレルヤ少年の答えといえば「召使い一号」という感じだ。

それ以来、ナオミはヤドリギ家で自分の置かれた立場というか、立ち位置というものが自然とわかったらしく、この日もおどおどした感じで、何かに脅えるように扉の傍でどもっていた。

「…あ、あの。ヤドリギおじさん…」

ジジ亭の主人は返事のかわりに彼女をチラリッと見た。

「お、お客様がいらしています」

ヤドリギは今度もチラリッとナオミと紳士を見た。

黒ずくめのお客は、少女に紹介され前へ一歩踏み出た。帽子に手をあてている。金持ちらしい紳士のいでたちだが頬の刺青といい、どこかうさんくささが残っていた。ヤドリギは女将と目配せして、つじつまを合わせるようにと合図をおくった。

家族の朝の団らんを邪魔されたのか、不承面をしながら「旦那、残念ながらご予約がいっぱいでしてね、それにうちは前払いですよ」とソファから離れ、男の前に立つ。

ヤドリギは商売上手とあって手をもみもみしていた。客など数えるしかいないことは少女の会話で確認済みでありながらも、黒ずくめの男は間髪入れずにいった。

「手間賃も含めて払う、なんとか良い部屋を五日間、都合してくれ」

男は札束がずっしりとはいった、山羊革（ゴート）の黒財布をわざとヤドリギ夫妻にチラとみせた。たちまちヤドリギ氏は猫声になった。大人は子どもに強くて、お金に弱いのだ。

大金をはたいてまでも、この黒紳士が人を探しているみたいだが、わざわざジジ亭に泊まりたい理由が少女には不思議でならなかった。巷ではこの汚い旅籠に宿泊することが流行なのだろうか。いやこの黒いお客が変わり者なのだ。きっとそうに違いない。このお客が探している人は彼の愛人かなにかで、この「カンペールのジジ亭」で落ち合うようになっているのだ、と少女は自分にそう言い聞かせた。

「お名前を頂戴してよろしいでしょうか、ムッシュ…」
ヤドリギは宿泊名簿に名前を求めたので、男は右手ですらすらっと自分の黒い万年筆を使い「ルレスエロ・ジェラール」という名を、職業欄の中には音楽家と書き、四百フランを目の前の男に手渡してやった。ヤドリギは四百フランを嬉しそうに年期の入ったヌメ革の帳簿財布にしまいこむと（音楽家？あんなおぞましい刺青を入れておきながらか、そんな風にはみえんがな）と鼻の穴をひくひくと大きくした。
ナオミは、大金を支払うこのジェラールと名乗る音楽家を哀れんだ。
「ここは一泊当たり二十フランの昼食抜きの安宿なのに」
心にそう囁いた。声をだして教えてたくても守銭奴のあくの強い暗黙の睨みが彼女を押し殺している。
「野良、はやくお客様をお部屋にご案内しなさい、二階の一番奥の部屋だよ」と鉄輪がついた青銅製のスケルトンキーを傍にいた少女にメンチをきりながら手渡した。お客の部屋の鍵だ。本当の宿泊料を奴に教えたらぶちのめすぞ！　と彼女を小声で脅す旅籠の主人。
「ご亭主、早めに朝食を作ってくれないか？　一晩中、道に迷って森をさまよっていたんだ」と音楽家。　傍にいた女将のヤドリギ夫人は、亭主に無言の視線を送る。最優先に刺青の音楽家の食事を用意することが決まったみたいだ。まさに阿吽の呼吸。
「無理を承知済みでの頼みだ。量は少なめでいい。私の部屋に運んでくれ」
男の言葉に頷くと、すぐさまヤドリギは少女に瞬きを三回した。瞬き三回が意味するところは「お客の朝食はお前が運べ」というものだ。これがナオミと彼らが会話を交すときのやりかたでもある。
部屋へと向かう階段は歴史をただよわせる、大きくすりにすりへった木製の螺旋階段。
手すりは大理石で装飾されている。騎士を題材にした浮き彫り細

工だ。壁にはこのジジ亭の歴代当主の肖像画が金の額縁で飾られ、どこか名門貴族を思わせる。階段は角がすりへり、歩くたびにミシッと床板がきしむ音が歴史の重々しさを感じさせた。遠くからはゴォーン、ゴーン、ゴーンッとサン・コランタン大聖堂の暁鐘が鳴り響く。と同時に一階から壁掛け時計の鳩の鳴き声も聞こえた。

ジジ亭の二階の間取りは、部屋が全部で八つある。すべて宿泊客用の部屋だろう。

表通りに面する方に細長い廊下が一直線にはしり左壁面の向こうは外だ。もう片方の壁面に七つの部屋に通じる薄い灰色がかった水色の樫の扉が七つある。床は螺旋階段と違い石床だ。歩くとコツコツと機械的な音が響く。部屋は一定の等間隔で仕切られている。扉と扉の間には、白銀の甲冑、棍棒、先が三俣に分かれた槍や長剣といった類の武器や飾られている。中世の騎士時代の骨董品なのか、ヤドリギの趣味が伺える。実に気色が悪い趣味だ。

八つめの部屋は、廊下の一番つきあたりにある。

貴族や富豪、著名人の宿泊用部屋とかつて女将から教えられた上流客専用の部屋だ。ナオミは一度も、掃除にも入ったことがない。扉の色が違う。黒い扉に金の唐草紋様であしらい重苦しい雰囲気だ。捉えようによっては拷問部屋のようにも思えるのだが・・・。

ガチャンッと主人から預かったスケルトンキーを錠前に差し込み少女は扉を開けた。

身がよだつ冷たい音だ。音楽家は暖炉のあるその部屋に通された。ナオミは食事を運ぶためにすぐに階下に向かった。部屋の内装は、一階の家人用の暖炉の間とうり二つだった。食卓もソファも、木製ポールハンガー、雄鹿の剥製もすべてが同じだ。絨毯の色と柄もだ。ヤドリギのことだ。一階の暖炉の間の調度品を買い揃えるとき、まとめ買いをしてその分、安く値切ったのだろう。ただ一つ大きなマホガニー製のシングルベッドを除いては。

黒い音楽家は、部屋に入るとたん自分の荷物をほどきはじめた。
帽子を脱ぎマフラーとフロックコートをハンガーに掛け、暖炉の上に備えているマッチで蒔きに火をくべていた。早くベッドで横になりたい様だ。刺青の男は蒔きに火がついたのを確認しソファに腰掛けようとしたとき、ドアをノックをする音が聞こえた。
「ジェラール様、失礼します。」と子どもの量ほどの朝食が少女によって運ばれてきた。ナオミの後ろには小さな用心棒のジョジョ・ダックスフンドがいる。食卓の上にピカピカ光る銀食器に朝食が装われている。ナオミも早く自分の朝食をとりたく、さっさと部屋をでようとしたときお客に呼び止められた。
「お嬢ちゃん、これは君の朝食だよ」とソファに深く腰掛けて声をかけた。
ナオミは入り口付近で立ち往生だ。
「朝食はまだだろう？　美味しいよ」

――だからなに？

「今朝のことは誰にもしゃべっちゃいけないよ、君のためだ。世の中には君の知らない世界もある。もちろん今回のは知らなくていい世界だ」と音楽家ジェラール。

――なんだ、偽善かと思えば口止め料か。とナオミは思う。

数秒後「ぐぅー」という腹の虫がナオミから鳴った。
たちまち少女の顔は真っ赤になった。確かに美味しそうだ。階下に下りていってもこれほどの朝食にはありつけない。あんな巨大な狼の群れをみたといえ、腹はすくものだ。第一この音楽家は、魔法も剣の腕も相当なものだ。本当に職業が音楽家なのかは実に怪しいのだが、ただ強いことだけは真実。刃向かったら殺される。ナオミにも粗末だがそれなりの「ささやかな人生」がある。ここは素直に

「うん」と頷くべきだ。いわれるがまま、すすめられるがまま少女はお客の朝食に手をつけた。
朝食のメニューはほくほくのハッシュドポテト、こんがり焼けた塩味のガレット数枚、それと目玉焼きとローストポークに挽きたての熱々のコーヒーだ。少女はおとものジョジョと一緒に椅子に座って遠慮がちに食べた。それにしてもこのお客はどうして、こうも自分に親切にしてくれるのだろう。

パチッパチッと暖炉の蒔きが心を和ませるように響く。
少女が食事をとっている間、ジェラールなる黒紳士は、ソファに深く腰掛けてナオミをじっと見つめていた。紳士の観察眼は確かなもので、ナオミは四方八方どこから見ても、誰が見ても本当に汚かった。痩せているし、顔色はどことなく青白い。
実際は十二歳なのに、十歳ぐらいにみえる。落ちくぼんだ大きな瞳、麗しいというか、彼女の容姿には胸をうたれる何かがあった。身につけているものといえば、冬だというのに使いまわされたカーディガンと古着のセーター、一着だけだ。おかみに打たれたと思われる青や黒のあざがところどころにあった。小さな手はあかぎれだらけだ。靴もぼろぼろだから、足はきっと赤ぎれだらけに違いない。その痩せ細った体は何とも痛々しい。
パチンッと暖炉の蒔きが炎と絡み勢いよくはじき飛んだ。
「君に渡すものがある」と靴音とともにジェラールは、背椅子にもたれている少女に近づいてきた。男は山羊革（ゴート）の黒財布から百フラン札を二枚、そっと彼女の右手に握らせた。今まで握ったことのないけっこうな大金だ。

――どうしてこんな大金を自分にくれるのだろう？

ジョジョは「ネコババしちゃえ！」と小声で食卓の下から囁き、犬のくせにネコるものの、やはりそうもいかない。少女はお金を受

けとる理由がないと拒むものの、男も頑として拒絶する。音楽家はここまで案内してくれたお礼だといいはった。

「ところで君は、ナオミ・ニトって女の子を知っているかい？」

少女は心が思わず飛び上がった。大金をもらっただけでも衝撃的だったのに、今度は自分の名前を聞かされ、少女の心は小刻みに震えた。

――なんでこの人は自分の名前を知っているんだろう？

ジョジョは知らないといっちゃえ、と目で静かに彼女の足元で合図をする。

親代わりの言葉に従うかのようにナオミは「知らない」とわざと嘘をついた。内心、この男が怖かった。ルレスエロ・ジェラールの落胆した顔が脳裏に焼きついた。彼は深く頭をうなだれた。ソファにもたれた音楽家の相当な悲しみが少女にも伝わってくる。暖炉の薪の砕ける音だけが部屋を木霊する。

――やはり嘘はいけない。

少女が真実をいおうとした、そのときだった。「野良！　野良！」朝食（モーニング）の時間とあって忙しいらしい。自分を呼んでいる夫人の声が聞こえた。ナオミはかるく会釈をして、音楽家に部屋の鍵を手渡すと黒い扉をパタンと静かに閉めた。そして犬とともに急いで螺旋階段をおりていった。

――午前六時五十分。

台所のカウンターにはずらりとお客たちの朝食が並んでいる。

ここでジジ亭の一階の間取りを説明しよう。ヤドリギ家の家紋が

刻印されている赤茶色のいかつい扉を開けると、天井の低い薄暗い広間が目につく。来客がすぐ気がつくように玄関扉のそばには衛兵が立つような警備室兼受付カウンターが備わる。受付カウンターの真向かいには、二階と三階に通じる螺旋階段があり、奥にはトイレが見える。

それを少しばかり通り過ぎると鳩時計が壁に掛けている廊下だ。そして廊下をはさんで左右に三部屋づつ仕切られている。手前の右の部屋は、黒い宿泊客も知っている赤い絨毯が敷き詰められた家人用の暖炉の間。かなり大きな部屋だ。向かい側は、暖炉の間と同じ広さでパーティー用の大部屋とも言うべきものがある。

暖炉の間の隣部屋は台所だ。この部屋は宿泊客と家人との共同台所であり、隣の暖炉の間と扉ひとつでつながっている。家人の朝食事はいつも扉は開放されているようだ。

ハレルヤが食卓で牛乳を飲むのが見える。台所の反対側の部屋は、宿泊客用の部屋となっている。台所の隣部屋、つまり扉から右側の奥の部屋は家人の寝室。そして最後の部屋、左側の奥の部屋は旅籠の書斎兼事務所だ。事務所には黒光りを放つ大きな鋼鉄の重たい金庫がある。

台所の内装といえば、大人が両手を広げたほどの長さの正方形の木製食卓が六卓ある。年期の入ったものらしく、所々に小キズやスレが見える。この黒い食卓に対して、食卓用の木製椅子が一二脚だ。模様も何も入っておらず味気のないデザイン。部屋は食卓と椅子しかない極めて質素なものといえる。

食卓カウンターは、オーク製でどっしりとしたものだ。カウンターから厨房が見えるのだが、この旅籠で一番お金をかけているような、銀製の食器や包丁や寸胴などの厨房道具の数々、そして黒胡椒などの調味料、レシピ本がずらりと並ぶ。ヤドリギはデブだけあって食にはうるさそうだ。

台所に急いで下りてきたナオミの顔を見るやいなや夫人は、カウンター越しにいきなり険しい顔になった。「ところでぐずの泣き虫の甘ったれや、お前はいつから人様の朝食を横取りするようになったんだ、え？」と彼女につめ寄った。

――なんでわかったんだろう？

ナオミは答えようがなく押し黙っていた。

「フンッ！　いいわけはよしな、お前のほっぺたに食べかすがついているんだ！」

「…あのお客様が食べていいって…」

「お前が物欲しそうな顔をしていたんだろ！」

ジジ亭の女将は右手をあげ、いきおいよくふり落とされようとした瞬間、コホンッと小さな咳払いがおかみの耳に届いた。目を周囲にやれば、あの黒ずくめの男ジェラールが立っていた。

「これは失礼、トイレのついでに食器の後片付けでもと――――思いましたね」

黒ずくめの男は女将の右手を凝視したので、夫人はとっさに右手を少女の頭にやってなでるふりをした。なんともぎこちないしぐさと緊張が台所に奔った。

「ご迷惑でしたかな？」

ロエスレル・ジェラールの女将をさぐるような声は、どこか憎悪を感じざるえない。

「お客様、困りますわ。この子にそんなことをされては。まるで私たちがこの子に何も食べさせてないみたいじゃありませんか」

事実なのだが、ジジ亭の女将は体裁をつくろうので必死だ。

「この甘ったれのチビは、少しでも甘やかすと図にのるんですよ」

甘ったれのチビ、この家でのナオミのもうひとつの名前だ。

「それで頼んでおいたパンはどこいったんだい？」
「あのパン屋は、あの…」
ナオミはパンのことをすっかり忘れていた。
「すいませんね、パン屋にいくところを私が声をかけてしまって」
どもる少女にジェラールが助け舟をだした。
「それなら、まあ、いたしかたないことですわね。おい、ともかく十フラン返しな！」
ナオミはエプロンのポケットに手をつっこんだが、そこにあるべきものがない。少女の顔がとっさに青ざめた。十フランのお金がどこにもないのだ。
かわりに男からもらった百フラン札を手渡すのは愚か者がすることだ。
少女は恐怖にさいなまれた顔でポケットをひっくり返したが、十フラン銀貨はどこにも見当たらない。ナオミがゆっくりと顔をあげれば、鼻の穴を大きくした女将は鬼のように見える。いやこれは本物（アル）な鬼だ。

「盗むなんていい度胸だ」
ジジ亭の女将の唸り声だ。今朝の狼より怖い。
「まったく育ちが悪くていやになるねえ。きな！」
女将は少女の手をとり、厨房の中へ引っ張ろうとした。するとすかさず「ごめんなさい、女将さん！」とナオミの悲鳴が聞こえ、食卓の脚にしがみつき、その場にしゃがみこんだ。女将が少女を無理矢理ひきずるなか、黒ずくめの男が声をかけた。
「その十フラン、これですか？」
男は女将に一枚の銀貨を手渡した。
「先ほどお嬢さんが会釈したときに落ちましてね」
「…それなら…まあ、それでいい…ですがね」
女将はどことなく歯切れが悪そうだ。
「心優しいお人に出会えて感謝しな。愚図の甘ったれ！　次はない

からね！」と女将の鼻息は荒くなった。

少女はこの不思議な男をじっーと見つめていた。

銀貨はきっと水汲みのときにでもなくしたに違いない、それなのにこの男の人はどういう理由かは知らないが、わざわざ自分をかばってくれる。少女の大きな目には驚きとともにこれまでにない、男への信頼感ともいえる表情がにじみでていた。

「さて私は一休みさせてもらおう、ここで失礼するよ」

ルレスエロ・ジェラールはわざと話題を変えたようだ。大あくびをして二階の自分の部屋へと戻っていった。ナオミにチラッと目配せをして。

「よろしいのですの、あなた？」と暖炉の間で、一部始終を耳にしていたジジ亭の主に不満をこぼした。

「かまわんよ」

ヤドリギは新聞を読みながらいった。

「今日はクリスマスイブだ、わしも一年に一度は気前よくなってもいい日じゃないか」

「九年前、そのあなたの年に一度の気前さがアイツをこの家に招きいれたのですわ」

「やれやれ、またその話か…」

ヤドリギのうんざりした口調が聞こえてきた。

会話をさえぎるように牛乳を飲み終わったハレルヤが大きなゲップをした。

ヤドリギの言葉どおり、この日、村はクリスマスイブとあってにぎやかだ。夜には村の名士たちがジジ亭に集まることになっていた。隣の部屋でにはハレルヤが目玉焼きの皿に顔をつっこんで、髪をくしゃくしゃにして寝ていた。食べながら寝ている姿は、もうどこか

らみても立派な小ブタだ。ハレルヤは潰れた黄身を顔にどっぷりとつけて満足そうだ。よだれが黄身に混ざる――――気持ち悪い。
ヤドリギは「さすが私の息子、ダイナミックな寝方だ」だと、そんなわが子を横目でみながら、ある記事にあった。

『東洋騎士（サムライ）の腹切りルーツはここにある？』

農場経営者M氏が、ペットのヤギに一万フランの紙幣を、ちょっと目をはなした隙に全部食べられてしまうというハプニングがあった。百フラン札を百枚用意、テーブルのうえに置いていたそうである。
電話が鳴ったので彼は現金をそのままにして、ダイニングキッチンからでた。五分ほど電話で話したあと、キッチンに戻ってみると、あろうことか雌ヤギのミシェルが今まさに、最後の新札を食べ終わるところであった。M氏は即座に獣医を呼び、ヤギの緊急開腹手術を依頼した。
「お金のほとんどは取りもどせましたよ、ミシェルにとっても辛い教訓だったがね」
獣医は手術代として、ヤギのお腹から出てきた湿ってグチャグチャになったお札のうち、五枚を差し引いたという。
我々も笑いごとではない。ブルターニュ地方・ふくろう党では温暖化対策のための予算確保の最有力手段として、新聞の廃品回収事業の撤退を要求している。来年の今頃、人々は一家に一匹、ヤギを飼わなくてはならなくなりそうだ

追伸　三日前にモン・サン・ミッシェルから脱獄した、サンチョ・ボブスリーは当局の捜査をくぐり抜け、今だ捕まらず。用心にこうしたことはないと思われる。

ヤドリギはうーんと唸り、悪態を思いつくだけいうと新聞を黒い革の型押し鞄にいれて、仕事の用意をしはじめた。廊下の壁掛け時計からはポッポー、ポッポーと鳩時計が聞こえてくる。午前八時の合図のようだ。

「町の連中どものところに、今晩のパーティーの挨拶にいってくるよ」

ヤドリギは夫人の頬に朝のキスをし、ちょっと目玉焼きの味がするハレルヤの頬にもキスをした。

ナオミには「へらへらするんじゃない、目障りだ！　あっちへ行け！」とキスのかわりに一喝した。別に慣れてるからへっちゃらだ。

（それにしてもあの黒ずくめの男、どこかでみた気がするがどうも思いだせない）

ヤドリギは腑に落ちないまま、我が家をあとにした。夫人は化粧のために寝室へ、なんと一時間と二十分もかけて化粧をする。それがまたものすごい厚化粧のため、ナオミはお面をつけているかのように思えたが、夫人の往復ビンタが恐いというのか、痛いので言葉にだすことはない。特に今夜はジジ亭でパーティーがあることだから、より念入りに仮面作りに励むのだ。

化粧をすませたヤドリギ夫人は、汚物を相手にするかのようにナオミをキッと睨んだ。

「私は美容院にいってくるからね、帰ってくるまでに部屋を片づけておくんだ。それから洗濯物もほして、床掃除と皿洗いもしておくんだよ」一思いにそれだけいうと、ヤドリギ夫人は、ハレルヤ坊やと共に近所の美容院へでかけてしまった。

鳩時計が午前十時をナオミに知らせる。

ナオミが床掃除を終わらせ、暖炉の間をでようとした瞬間だった。ドサッ、誰かが窓に雪だんごを打つけた。

――まったくどこの誰だ、ガラスが割れたら、女将に怒鳴られるじゃないか。

窓の外には赤いセーターに毛糸のインディゴのジャケットを着た、少年が手をふっていた。

黒デニムのオーバーオールがかっこいい。深い青のニット帽をかぶっている。手にはなめし革の手袋をしている。少年の名前はテル・ウォ・アボカド、ナオミの親友だ。犬以外の。

しなやかなサラサラの茶髪、美しい緑の瞳。色の白い肌。そしてバカ正直な性格、わがままなところがたまに傷なのだが、ちょっぴり頼れる同じ歳の少年だ。自分に想いをよせていることは女の子だから、すぐにわかるものの、テルは彼女にとってただの男の子にすぎない。そんなテルもジョジョ・ダックスフンドと会話ができる。ジョジョと会話を交わすことができるということは、お互いが心許せる仲であるという何よりの証拠だと思っていい。

暖炉の間の窓を押しあげて、少年にどんな用事かと聞けば、興奮しながらあのダ・カーポから電話をもらったんだぁ、と少年は頬を紅潮させながら胸をはった。「ダ・カーポが！」とナオミは驚嘆した。電話の内容によると空間移動魔法で例の場所とダ・カーポ邸とをつなげているからナオミに早く来いとのこと。

ダ・カーポ、この辺では「魔女の血を受け継ぐ者」として知られている。

噂どおり若干魔法も使える。彼女が少女に会いたいらしい。ちょうどいい。最近、ナオミは魔法を習うために魔女に会いたくても、仕事が多忙らしく門前払いの日々が続いていたからだ。その彼女から会いたいという電話があったのだから少女は喜びが隠せない。

「あの魔法を使う謎の音楽家が、彼女の知り合いかどうかも確認できる絶好のチャンスだわッ！」

少女は彼女のところに行くことにした。
どうせお昼まではきっとヤドリギ夫人は帰ってこないのだから。少女は支度を整えると犬とともに外に出た。テルも魔女から女を守るのは男の役目だといい、好きな女の子と一分でも一緒にいたいのか、ナオミと魔女の屋敷に行くことにした。

「で、アイツは誰だい？」とテルは白い息を吐きながら、二階の窓際から自分たちを密かにのぞき見ている、例の男をみて、うさんくさそうに少女に尋ねた。ナオミのかわりに「人さらい」とダックスフンドが返事をした。

第5話　父の友人【2】

第５話

考古学者ダ・カーポと会いたい人は、五年前から予約を入れないと無理といわれるほど、彼女は大変人見知りが激しいことで知られる。その理由は明らかに彼女の著作にあると言っても過言ではない。

ダ・カーポが六年前に出版した『古代魔法のすすめ』がミリオンセラーになったのがきっかけで、彼女の仕事が評価され、より魔女は仕事に没頭した。よって引きこもり癖はさらに悪化したのだ。少女がそんなダ・カーポに呼ばれているなんて世界の考古学者たちが知れば、いったいどんな顔をするだろう。

ところでこの魔女の屋敷へ行くには、普通に町の路地といった生活道路では辿り着くことは決してできない。

確かに肉眼では屋敷を確認できるのだが、途中で通路が別の場所とつながり、屋敷に辿りつくことができないのだ。そこが彼女を魔女と呼ぶ所以であり、カンペールの生きた伝説ともいわれる。それゆえダ・カーポ宛の郵便物などは、彼女が直接取りに行くことになっているのだ。しかも人通りの少ない真夜中か早朝にひっそりと彼女は荷物を受け取りに行く。理由は定かではない。

しかしナオミとテル、そしてジョジョにはダ・カーポと面会できる秘密の入口がある。だから心配ご無用だ。それは偶然、二人が西はずれにある、カンペールの森の近くの共同墓地を探検していたときに発見した秘密の通路だ。西はずれの墓地は近くにある原始林の影響もあってか、一年中、濃霧に包まれている不気味な場所だ。原始林と同じ陰鬱な空気が漂い、町の人は墓守の任務以外は近付きたがらない場所でもある。不気味な声を放つ烏や野良犬の溜まり場だ。

今から二年前の冬だったと思うが、墓守の任務でテルのご先祖の墓掃除を終えたあと、ついでだからと墓地を冒険していたとき、野犬に遭遇した二人と一匹は、必死の思いで墓地のなかを逃げまわり、墓守の小屋に命からがら逃げこんだ。それが秘密のはじまりだった。

墓守といっても、正式にこのカンペールにそういう職業の者はいない。大聖堂の任意を受けてカンペールの自治会が、週に一回の割合で町の衆、といっても家族単位（もちろん子供は数には入らない）であるが小屋に泊り込みで墓を清掃するのだ。無論、気持ちほどではあるが教会から、わずかばかりの駄賃が支給される。ことはアボガド家の当番の時に起きた。

「テル！　あそこよ！　あそこに逃げ込みましょう！」

子供二人と犬は命からがら小屋の腐りかけの木製扉をあけた。小屋のなかに一歩踏みだした瞬間、ナオミは悲鳴をあげた。

「どうしたんだい？」テルの声だ。

「う、うん。なにか…いる、私のお尻の下に…」

ナオミは何か大きなベチャッ、としたものを踏んでしまったようだ。

一体全体なんだ？

少女はぷるぷるとふるえている。とすぐにお尻の下から「…そ、それは私ダ・カーポですわ……お二人さん」と彼女の苦しそうな声が聞こえてきた。いやはや大きくてベチャッとしたものはダ・カーポ、その人だった。

考古学者ダ・カーポの美しい容姿は、今でも忘れられない。

声は甲高く甘えたような声、象牙のような乳白色の肌。細身で長身、背丈は百八十センチほどはある。みずみずしいカールのかかった黒髪は、両肩からその豊かな胸までかかる。薄いピンクの唇に淡

い頬そして白い歯。綺麗に整った長爪にピンクのマニキュアが可愛らしい魔女のお姉さまを演出させる。
細い眉毛にラメによるアイシャドーの目は大きく見開き、見る者を一瞬ドキッとさせてしまう。両耳を彩るピアスは、金の装飾に大きな黒真珠が揺れている。彼女の首を細く美しく見せる黒真珠のネックレスに、ヒダの付いたのウールの白いセーターが対照的で魅了される。
靴は赤いリボンの房が付いた光沢のある黒いハイヒールブーツを履き、実際の身長は１７５センチ前後だろう。ニットの濃紺のショートパンツと、アメリカ先住民がデザインしたような幾何学柄の毛織のカーディガンを羽織っている。

二人は大慌てで、考古学者の背中から飛びおりた。
「本当に、本当にあのダ・カーポ先生なの？　伝説のカンペールの住人ッ！」とテルが驚く。
「ノンノン！」
ダ・カーポは人さし指をたてていった。
考古学者はパンパンッと身なりを整えながら、すぐ後ろの扉を指さした。振り返ってよくみると内扉は金装飾が美しい重厚なオーク製の赤い扉だ。この扉は外側と内側と居場所が異なる「開かずの扉」という魔法の扉らしい。しかもこの豪華な赤い扉には銀のプレートが貼られており、こんなことが書いてあった。

「『開かずの扉』Ｎｏ．２８９８７６５４９」

ブルターニュ地方
フィニステール県南部　カンペール
西のはずれ、原始林の手前、カンペールの墓守小屋

内容は思いっきり怪しいものの、そこの窓からみえる風景に二人と一匹はなぜか見覚えがあった。
あそこにあるとんがり屋根の大聖堂と尖塔、歴史を感じさせる中世の旧市街、美しい家々が並ぶフレロン通り。通りに見慣れた人がいる。ヤドリギ一家だ、ハレルヤ坊やはなにかを買ってもらって嬉しそうだ。間違いない。ここはカンペールのダ・カーポの屋敷だ。
内装からして実験室なんだろう。フラスコや奇妙な動物の剥製や頭蓋骨、人体模型がおいてある。
少女たちの目の前には難しい魔法の哲学書っぽいものが、大きな長方形の書棚にずらっと並んでいる。勉強嫌いのテルにとっては、じつに重苦しい光景だ。天井も側壁もすべて灰色のレンガで覆われており、床は大理石だ。とても生活臭たるものが漂ってこない。部屋の奥まで見通すことができず、なんとも細長い実験室なんだとテルは驚きが隠せなかった。実際のダ・カーポ邸の外観よりも、屋敷の中は何十倍も広いのだ。これもダ・カーポの魔法の一つなのである。

ナオミは何がどうなっているのかわからず、きょとんとしていた。
「墓守小屋は、ダ・カーポのアトリエと空間移動魔法でつながっていますの、諸君」
魔女は静かに語る。
彼女の説明によれば、ここのすべての部屋は扉の文字で記されている場所に直接につながっており、そんな摩訶不思議な部屋がざっと五十部屋、禁断の扉が十五部屋ほどあるらしい。この空間移動魔法はダ・カーポが復活させた古代魔法だ。うっかり開けるものなら、帰れなくなる場合があるので注意が必要だとか。まだ実験段階中のため、考古学魔法学会にも発表はしていない。これが魔女つまり考古学者ダ・カーポと二人と一匹の最初の出会いであり、この日から彼らはダ・カーポの良き実験相手（モルモット）となった。

衝撃的な二年前のことを思い出しながら、ナオミたちが墓守小屋から部屋にはいると、みるみるうちに真っ暗な廊下に明かりが灯された。

大理石の床、いや廊下に近いのだが赤い絨毯がどこまでもひかれており、その先がまったくみえない。五歩ごとに同じような赤い扉があって、各々のかけ札には「ミスリル鉱山の炭坑扉」とかいろいろ書いてある。クリスマス前夜祭とあって、扉と扉の境目には燭台以外に樅の木が飾られていた。赤いキャンドルにゆらりと小さな聖なる火が灯され、おなじみの黄金の鐘と華やかなイルミネーションの飾り。ここは内装こそが若干の変化はあるが二年前の実験室のようだ。

「今度はどんな実験かしら？　それよりジェラールさんについて伺いたいのだけど」とナオミはひそかに脅えた。最近の魔法実験といえば一年前ほどの話だが、ヤドリギ夫妻を呪い殺す呪文を教えてもらう代わりに、禁じられた黒魔法『カメレオン』という魔法の再現だった。

互いの心と記憶を入れ替えるという魔法で、数分だけナオミとテルの身体が入れ替わる禁じ手だ。実際に身体が入れ替わってみれば、テルは女の子の身体に戸惑い、ナオミは何だか、股間に違和感を感じた。

噂のダ・カーポはせかせかと忙しそうだ。

「ノンノン！　今回は人体実験じゃなくて、飾りつけのお手伝いよ、実験といったら実験だけどね」

ダ・カーポはナオミを見た。

「あらっ、　ボーイフレンドも一緒についてきちゃったのね」

「そ、そんな、そんなんじゃないですぅッ！」

ナオミは顔を赤らめ、そんなん呼ばわりされたテルはどこか不満

そうだ。
二人と一匹の目の前には、青々と茂った巨大な樅の木があった。高さは大人3人分ぐらいはある。突如、魔女ダ・カーポは子供たちに一つの質問をした。
「さて諸君は、サンタクロースは信じますか？」
子供たちの答えは聞くまでもない。

緑といえば赤、赤といえばリンゴ。大昔からクリスマスツリーにはリンゴが不可欠、でも今年は良質の赤いリンゴが手にはいらないそうだ。やっぱりアメリカ風のポップコーンでは、いまいちしっくりこないとか。高級なアルザス産の樅の木には、やはりそれに似合った飾りが必要だと、考古学者は変なところにこだわる。
「もうまったく！　肝心なときにかぎって、助手のエンガチョがいないんだから！」
エンガチョとは彼女の部下であり雑務係だ。主に郵便物の受け取りや電話の応対などが彼の仕事だ。それゆえダ・カーポはかつて男だと思われていた。魔女ではなく魔法使いだという噂があったほど。

「僕はポップコーンでもいいよ」とテルはクリスマスツリーに飾ってあった、一週間前のパサパサのポップコーンを食べていた。ジョジョもクリスマスツリーにしがみつく。
「ですが、それも今日で解決済み、ようやく解明なの。この七日間、樅の木を見るたびに苦しかったわ」とダ・カーポのあきれ顔。ダ・カーポの解決済みというのは、三日前にとある町の競売で競り落とした錬金術で練成したリンゴが今日届いたそうだ。出品者の『ロベルト・パパティーノ』は、新進気鋭の錬金術師で知られ、その作品群は収集家たちのなかで大変人気があるそうだ。

そんな矢先だった。ミシッ、とナオミは赤い扉がきしむ音を聞いた。

――誰かが自分の手をひっぱっているようだ。

「ねえ、テル。なに？」

ナオミが迷惑そうに尋ねれば「なんのことだよ」と怪訝そうなテルの顔。

確かに誰かが彼女の手をぐいぐいってひっぱっている。テルじゃなければ誰だろう？　と後ろにふりむけば、扉のすきまからいくつもの目がみえ、そこから手が伸び、ナオミの手をひっぱっているではないか。思わず少女は悲鳴をあげた。

扉の隙間、暗闇のなかに光る二つの目とナオミは目が合ってしまった。

「アタシ、ハナコ・ゴースト。イヒヒヒヒヒヒ！　生きている人間ッ子が憎い！」

ジョジョは低い唸り声をあげて、爪と牙をむきだしで飛びかかる。魔女ダ・カーポは「エンガチョの閉め忘れですわ」と勢いよく扉を閉めた。

バンッ！　と犬はドアにぶち当たり、半ば死にかけだ。テルといえば腰がぬけてしまったらしい。まったく動けなかっただけでなく、情けないことに半べそ状態だ。おしっこを少し漏らしたのかもしれない。股間の部分に恥ずかしい滲みがにわかにできている。ナオミはぶるぶると震えがとまらずにいた。今朝の狼に続いて二回目だ。

「カーボネック城のゴーストたちのいたずらですわ、お気になさらないように！」

ダ・カーポは息づかいを荒くした。

この赤い扉の銀のプレートにはブルターニュ地方、森のアルゴート、アッパータウン、迷いの森のカーボネック城と記されていた。

そんな二人と一匹におかまいなく、自分は調べものがあるからと「ナント／ブルターニュ大公城跡、ナント歴史博物館への扉」という扉に手をかけ、奥の扉へとゆらりと姿を消してしまった。
「ダ・カーポさんの用事って何だったのかしら？」とナオミ。
「父ちゃんがいうには、考古学者は昔から変人とバカが多いってさ」
テルにいわれては世話がない。そのすぐ直後、先ほどの扉が勢いよく開いた。

噂の変人のダ・カーポだ、すでに彼女の腕にはぎっしりと何十冊もの本が積まれてあった。
悪口が聞こえたのだろうか――すると考古学者のような本、本のような考古学者は二人に話しかけてきた。
「そうそう忘れるところでしたわ」
二人と一匹をわざわざ呼びだしての緊急の用事というものは、届いたばかりのこのリンゴをアルザス産のクリスマスツリーに飾りつけてほしいとのこと。話の内容によると、これも実は錬金術の魔法の実験の一つらしい。ただこの実験には、クリスマスの聖人を信じる子供の純粋な魂が必要だということ。世俗的な大人や魔女ひとりだけでは、実験はできないのだ。

「お二人さん、アップルパイは嫌いじゃなかったですわよね？」
甘ったるい声でダ・カーポはテルを誘惑する。
「僕らをアップルパイで買収するきだな」とテルは、ダ・カーポの唇に心を奪われた。
実験後のリンゴの将来は、まっすぐアップルパイになる運命にあるようだ。二日後とみていいかもしれない。テルはそんなものでは絶対に手伝わないといわんばかり。彼女に関わるとろくなことがないからだ。魔女は持っていた錬金術のリンゴを、そっと少女に手渡した。

「あらっ、テル・ウォ・アボカド。先ほど誰が賢いですって？」
ダ・カーポの不気味な笑みが恐ろしい。
「アップルパイです」と先程の悪口をおもくそ後悔した。
「素直でよろしい」
テルを説き伏せたダ・カーポは優越感にひたりながら、すぐに扉を閉めた。
二人は唖然としていた。ナオミは、黒き音楽家のことを聞き忘れたことを後悔し、テルはアップルパイで妥協した自分が悔しくてたまらないかのようだ。ジョジョは静かにしっぽをぱたんっとふっていた。

しばらくして少年がなんとか樅の木によじ登り、リンゴの飾り付けに成功した。
その時、少女たちの耳にはサン・コランタン大聖堂のお昼の鐘の音が聞こえた。ナオミはヤドリギ夫人が美容院から戻ってくる前に帰らなくてはいけないことを少年に告げた。
「今夜はジジ亭で町のお偉いさんが集ってパーティーがあるの、その準備をしなきゃっ！」
テルはクリスマスの前夜祭というのに仕事のある少女に同情し、ジジ亭の向かいのにあるブルトンパブで、彼女の勤労を祝し料理をおごることを約束した。そして二人は互いに来た扉をあけ、ささくさとそれぞれの持ち場に帰っていった。

第6話　父の友人【3】

第6話

クリスマスの前夜祭に晩鐘が町一体に鳴り響く。その鐘音は今日一日をよく働いた者には、やさしく包み込み、道楽者に対しては静かに「懺悔」を促すようにも聞こえる。寒気のなかサン・コランタン大聖堂の鐘楼がモノトーンに沈み、町の商店街は一気に魂が抜けた。まるで町はクリスマスの聖人に贈り物への感謝の祈りを捧げるかのように静謐だ。

――午後六時三十分。

ジジ亭の真向かいにある、生粋のブルトン人ニコレット氏が経営する『山荒し（ハリネズミ）』は、歴史ある黒瓦のトタン屋根のブルトン人のパブだ。「山荒し」と書いたオーク製の立て看板が店の前に置かれている。看板にはニコレット氏なのか、店の名前の他にデフォルトされたチョビ髭面の中年男とビールのジョッキが描かれている。暗闇の中、酒場から漏れる光が人の心を癒す。

「山荒し」たる建物の外観は、横長の長方形の上に二等辺三角形をのせた形だ。建物の上部屋根の黒い鉄製の煙突の部分には、蔦なのか苔なのかよくわからない雑草がびっしりと生い茂り、一種の森となっている。

建物の中心に正面玄関たる華麗な樫製の細長い扉がある。扉の上部はアーチになっており、そこに流れるように店名が刻印されている。この青緑の扉はステンドガラスで装飾された開き戸で、開ける度にドアの上部に取り付けてある黒いベルが来客を告げる。扉の前には苔のはえた石の階段があり、数えるところ四段。木製の扉を中

心に左右には、赤ワイン色のペンキを塗ったマホガニー製の八本の円柱が等間隔に飾られている。その間には大きなガラスの飾り窓が四つあり、向かいのジジ亭を数名の酔っぱらいがパブの中から眺めている。建物全体は黒いレンガで作られており、赤い円柱と見事な色合いを醸し出す。

ニコレット氏の酒場（パブ）には、連日わいわいと町の人々、ブルトン人たちがここにブルトン語を求めてやってくる。そんなことはじつはどうでもよくて、酒場にはいろんな噂が飛びかった。店員もペチャクチャと噂話。店の主人もペチャクチャと噂話。お客さんもペチャクチャと噂話。でも誰かが本当のことを聞きたいときは、この店には来ないのだった。

高級木材のマホガニーで内装された石造りの酒場は、夜となるとランプの灯火の影響もあり、パブは小麦色一色になる。酒場の空間は入る者によれば黄金に包まれた宮殿とも言い表すことができよう。

酒場は、ざっと大人が五十名から六十名ぐらい余裕に入れる広さだ。間取りはもちろん外観と同じく長方形だ。青緑のステンドガラスの扉を開けると、すぐに目に付くのは、奥に設置されている卓上部分が大理石で作られた巨大なバーカウンターである。バーテンダーが入ってきたお客さんとすぐに挨拶をかわせるように設置されている。

カウンターは酒場の左右に横長に一直線にのびている。カウンターとともに脚の細長い天然木のスツールが、ざっと二十脚ほど置かれる。台座は黒い革で作られている。カウンターの内側にはオーク製の電話に、ずらりとフランス産のボルドーワインや白ワイン、外国産のウォッカやスコッチ、ウィスキーなどの酒瓶が、酒棚にグラスと共に綺麗に整列している様は壮観だ。そしてカウンターの上には鍍金の蓄音機がある。

バーカウンター以外に目に付くのは、左右におかれた木製の円卓のバーテーブルと天然木のスツール三十脚。バーテーブルは直径二メートル程あるもので、ざっと十台はある。各テーブルには、高さの１５０センチの革製の仕切り壁で区切られている。またワインなのかビールなのかは分からないが、酒樽が左壁面にピラミッドのごとく三段に積まれ、それを監視するかのように直径１メートルの丸い白の合金の鳩時計が左壁に吊るしてある。時計の数字は、アラビア数字ではなくルーン文字なるルーン数字が刻印されている。右側の壁面には、時間の番兵ではなく百獣の王の剥製が容赦なく酔っぱらいを見下ろす。

ジジ亭側の窓際には、金の刺繍をあしらった重たいカーテンが外気から内部を守っている。寒さといえば、黒い鋼鉄製の薪きストーブは忘れてはいけない。右側のジジ亭寄りの窓際のレンガ台の上にそれは設置されている。煤だらけの四角い姿をしており、薪きを焼べるその大きな口は、まるで蒸気機関のボイラーだ。空気口から垣間見ることのできる薪きが燃焼していく様は、ときに酒飲みを夢の世界へ誘う。細長い煙突が天井へ一直線にのびる。そして極めつけは、クリスタルガラスの巨大なシャンデリアだ。酒場の様々な色彩が乱反射して美しく光り輝いている。

酒場は前夜祭とあって、カウンターの左隅の酒樽の傍に、大人の一人分ほどの高さのクリスマスツリーが置かれている。右隅のバーテーブルではワイナリーの農夫たちが、おいしそうに塩味のガレットをつまみにして、シードルを静かにちびちび飲んでいた。カウンター席では人のよさそうな大きな男の人がこの店の看板娘と話をしていた。

ちょっと右に離れたカウンター席ではパイプをゆったりと吹かしながら、日刊新聞「毎日ブルトン新聞」を得意そうに読んでいる老人がいた。右一番隅の暗闇に隠れてシードルを飲んでいるのは今朝

一番で、この町にやってきた真向かいのジジ亭に宿泊している例の音楽家だ。

『山荒し（ハリネズミ）』の黒いベルが静かに鳴った。

ナオミとテルが店にはいると、とたんに会話は静まった。酒場の皆はテルを知っているようだ。なかにはニタッと無気味な笑いを浮かべる者たちもいた。少女をみて看板娘のサンタマルタは、カウンター越しにそこに並べてあるグラスにゆったりと手をのばして「二人とも、牛乳でいいかしら」とからかった。

突然、店内に爆笑が沸いた。

喝采の中、二人は顔を真っ赤にさせながら、小太り男の横のスツールに座した。足が床にとどかなく、二人とも両足を行き場なくぶらぶらとさせている。少年と少女の間で犬がとぐろをかくように床に寝そべった。しっぽをパタンとひと振り。

サンタマルタは町の孤児院に、いつも月末に寄付をしてくれるとても心がきれいな町娘だ。彼女もナオミと同じで親がいない。このブロンズのショートカットの女性は、まつ毛が長く青い澄んだ細い目がとても印象的だ。細くもなければ太くもない姿が、酒好きの中年男性の心を魅了している。

白い絹のエプロン越しに想像ができるその豊かな胸も人気の理由かもしれない。笑顔が素敵で、微笑むと八重歯が綺麗だ。声は明るく弾み、はっきりとモノを言う口調が、私の人生は男なんぞには頼るものかという姿勢をにじみ出す。バロック真珠と金製の人魚をデザインした耳飾りがとても似合う。赤いエナメルの靴に白いブラウス、黒に銀の刺繍が入ったスカート。ナオミが憧れる町の女性の一人だ。

サンタマルタはナオミにニコッと微笑だあと、二人に甘酸っぱいアップルサイダーを作ってやった。少女に「今日のパーティーの準備は、もう終わったの？」と尋ねれば、ナオミのかわりにテルが答えた。

「うん、今さっき晩餐の仕込みが終わったらしいよ、パーティーは九時だから、八時半には戻ればいいってさ」と少年は、少女の勤労に祝して料理をおごることを看板娘に伝えた。

少年にとってこの大好きな少女に、夕食をご馳走することはこの上もない栄誉なのだ。だがナオミは、そこの右隅で飲んでいる謎の男から今朝二百フランをもらっている。実はこの少年よりもずっとお金持ちなのだが・・・。彼女は、この二百フランをすぐに使わず大事な時まで、貯金するつもりだ。

「ところで、今日は絵描きのグッドウィル画伯とは会わないのかい？」

看板娘に太った男はさりげなく、話の続きをはじめた。

「絵のモデルは明日よ、エンガチョ」

サンタマルタはどこか嬉しそうだ。

「フンッ！クリスマスデートかい！」と、背丈二メートルほどの大男は悪態をついた。

エンガチョ、この小太り男の職業は申し上げるまでもなく読者にはお分かりだろう。

そう魔女ダ・カーポの助手だ。仕事をサボり、どこをほっつき歩いているかと思えば、彼はこの酒場に昼間から入り浸っていたのだ。いや雑草のように一輪の花をお目当てに根をはっていると表現すべきか。

容姿は、白いものが混じっている黒の長髪に、無精髭と厳つい揉み上げの面構え。ほりの深い灰色の目が油断はできない無頼漢を思わせる。黒豹の毛皮にどこかの一流ブランド品であろうと思わせる上質な紳士服。淡いピンクの絹のシャツにタータンチェック柄のベ

スト、赤いネクタイ。そしての合金の雄羊を型どったカフスボタンを身に付けている。四つボタンの優雅なインディゴの上着が、着こなすものを上流人に思わせる。小太りでなければ二枚目のプレイボーイとして、さぞや評判になっているにちがいない出で立ちだ。

クリスマスといえばサンタクローズだ。不思議なことにサンタマルタには毎月、決まってミスリル金貨三十枚を送ってくれる足長おじさんがいる。そのおかげで生活には困ってはいない。同じ親なしといえども、ナオミとは根本的にそこが違っていた――つまり彼女は親の愛情に恵まれてはいないものの、貧乏ではないということだ。

エンガチョたる小太り大男は「あの人はたぶん、君のことが好きだと思うんだな」と画家に気をつけろよともいうように警告した。サンタマルタは下衆の勘ぐりはやめてというように「うーん、どうかしらね。でもとっても優しい人よ」と受け流した。それでもこの小太りの酔っぱらいは看板娘にしつこく忠告する。

「そうかい、俺っちは大嫌いだな。この人参もだけど…」

エンガチョは本当にグッドウィルという人が小憎らしいという感じだ。だけどナオミはこんなとこで、仕事をサボっているエンガチョが本当に小憎らしい。話のネタがつきたのか、太っちょのエンガチョは鼻を鳴らし、バター葉巻きを注文した。

「おい、わん公。人参でも食うか？」

（いらないよ）とジョジョはプイッと横をむいた。

サンタマルタは「二フランよ」といって、エンガチョにバター葉巻きを手渡せば、彼はさっそくそれをぷかぷかとうまそうに吸いだした。まわりはバターのいい香りがただよってくる。テルも父親からの頼まれごとを思い出したらしく、エンガチョの吸っているバター葉巻きを三本注文した。

バター葉巻――それはブルトン社会の魔法文化遺産だ。
通常の使用されるタバコ葉とは違い、特別の葉を使った葉巻タバコだ。火を付けると香料が魔法により化学反応を起こし、バターの香ばしい匂いと味が、吸う者に至極の楽しみを与える。健康には一般の葉巻と同じぐらい害を与えるそうな。このタバコは、ブルトン人のとある企業が製造しブルトン人社会のみに小売販売している。なお製造方法は企業秘密だそうだ。予備知識だが灰は、スープの調理料としても使われる。ジジ亭の本日の晩餐会でも使用されている。

「まだ未成年なんだから吸っちゃだめよ」
バター葉巻きを三本手渡しながら、サンタマルタは憂う。
「吸わないよ、たぶん。それでいくら？」
「五フランでいいわ」
「でも黒犬が吸うかも。このダックスフンド、不良だからね」
（…鼻でもかじってやろうか？）とジョジョはボソボソ呟いた。

ちょうどそのときカウンター席の今では昔懐かしい、オークでできた高級ゴシック電話機が皆の注目をあびた。電話はジリジリーンとやかましい音をたてた。
「はい、こちら『山荒し』です。ええ、息子さんのテルくんですか？」
サンタマルタはチラリッと少年に目をやった。
「うちの父ちゃんだ。帰りが遅いから怒っているんだ！」
テルの顔は青ざめた。
「いいえ、もう帰りましたよ。お金を忘れてるって？　ご心配なく葉巻代はいつもどおりつけておきましたわ。あれっ、電話が切れちゃってるわ。すぐにアボカドさんは都合の悪い話になったら電話を切るんだから」
看板娘サンタマルタはぷりぷり怒っている。

「俺が払ってやるよ、テル。ほれ、五フランだ。先生のおもり代なんだな。どうせ恒例のリンゴの飾りつけだろ？　お前たち前夜祭に素晴らしい魔法の実験ができてよかったな。俺に感謝しろよ」
酔っぱらいエンガチョはテルのかわりに代金を支払ってやると、わが恋敵とばかりに、グッドウィル画伯の文句をぶつぶついいながら山荒しをあとにした。

――ポッポー、ポッポー、ポッポー。

白く円い合金の鳩時計が真夜中の八時を告げた頃、支配人（オーナー）でバーテンのニコレット氏が少年少女を睨みつけた。
ニコレット氏。この壮年は頭がハゲているが、身体はエンガチョと変わらずにデカい。支配人というほどあって蝶ネクタイにサテンの燕尾服を身に付けている。黒の革靴がオシャレだ。酒場のギャルソンとしては、その礼儀正しさがブルトン社会で有名だ。多くの酒を愛するブルトン人が信頼をよせる酒場のオヤジさんなのだ。
支配人は「八時だぞ！」とテルにギロリッと鋭く言葉の刃を突き刺す。
「さあ、帰った、帰った。子どもの時間は終わりだ！」看板娘も少女に同情しながら「さあ、晩餐会に支度に戻ってナオミちゃん」と少女を励ます。
まったくそのとおりだ、一分でも遅れたらヤドリギ夫人の往復ビンタが待っている。うたた寝していたダックスフンドは、めんどくさそうによれよれと、二人についていった。

子どもたちがいなくなると店内の雰囲気はがらりと変わり、一気に寂れた感じになった。酒場というものは人が居てこそ息をする、とブルトンの古の諺もまんざらでもない。

「…あの子たちはブルトン人だろ？　どうしてでかけない？」
声の主は黒ずくめの男、ロエスレル・ジェラールだ。
「でかけるっていうと、その…騎士の見習いですかい？」とニコレット氏はぼやいた。
「それがブルトン人の伝統じゃないか…」
騎士の古いしきたりで騎士になる子は、十三歳の誕生日までに騎士の従者として独り立ちしなければならない。でもその年での独り立ちは今の世の中にあわず、年々その伝統は廃れつつあった。ブルトン人の世の中も変わりつつあった。

歴史を紐解き、さかのぼること数百年ものブルトン民族物語。
今やブルターニュの人々が働く場所が、ブルターニュ地方株式会社と呼ばれる。それは名前を変えた白の公国ブルターニュといってもいい。社長のアーサー・ブルトン歴代公爵といっても、世襲で本人が名乗っているだけにすぎないものの、ブルトン人においては大きな意味をもっていた。
ブルトン人とは『アーサー王と円卓の騎士団』を先祖に持つ、フランス人のことだ。彼らがフランス西部に白の公国ブルターニュを建国したのは一千年前といわれ、歴史的にブルターニュ地方は、フランスとは違う独自の文化を育んできた。ブルトン人は先祖の遺産として受け継いだケルト伝統の音楽と文化、そして『アーサー王と円卓の騎士団』の社会秩序を誇りにしている。
その領土は常にイギリス王国とフランス王国に狙われ、十六世紀には公国としてフランスに併合された。隣国に併合され、国としての地位は奪われても、白きブルターニュ公国の領土と歴史は、その子孫たちに脈々と受け継がれていった。
――やがて時代は大きく転換した。フランスに革命が起きた。
俗にいうフランス大革命である。革命後、フランスが王制から共

和制へと変わっていくなかで、フランス国王がその領土と身分を失ったように、ブルターニュ公爵もその領土と身分を失うはめとなった。もはや公爵とは名ばかりにすぎず、公爵領などはなから存在しない没落貴族となった。

そんな滅亡の危機にあった公爵家を救ったのが、現公爵の祖父アーサー・ブルトン十六世だ。青年実業家でもあった公爵は人々に呼びかけて、一風変わった名前の不動産会社をつくった。それがブルターニュ地方株式会社だ。ブルトン人のなかでは通称「ブルトン政府」と呼ばれる。

ブルトン人たちは公爵の呼びかけで、ブルターニュ地方株式会社に自分たちの土地を預けた。とくに大きな土地を預けた領主たちはその大きさから市長、町長、村長とよばれる領地、土地の経営者となった。また彼らも公爵を見習って、自分たちの領地を株式会社にした。

こうしてブルターニュには多くの株式市町村が誕生し、ブルターニュ地方株式会社はブルターニュ地方のほとんどの土地を所有する大手不動産会社、財閥となったのである。彼らはいち早く古い国家概念を捨て去った、新しい国家を作ったともいえよう。これに伴ってフランス語が彼らの公用語となった。民族の言葉「ブルトン語」は野蛮な過去の象徴として、フランス政府から捨て去るべきものとされた。

ニコレット氏はグラスをキュッキュッと磨きながらいった。

「今じゃねえ、お客さん。危険だからといって見習いをやらさない親もいるんですよ。最近の子どもはブルトン語もろくに喋れなくなってますしね」

ブルトン語は自分たちにとって文化と歴史そのもの。またブルトンの騎士道は自分たちの社会秩序そのものだ。現在、ブルトン語を喋れるブルトン人は二百万人、そのうちブルトン人社会で生きるこ

とを選んだのは五十万人だとか。

「ブルトン語を失えば、我々はすべてを失う。このままでは百年後、ブルトン人がブルトン語を喋れない世界がやってくるだろう。まったく世も廃れたもんだ」とジェラールは世の不条理を呪うように、吐き捨てた。

「で、お客さん。お探しの女の子は見つかったんで？」とニコレット氏。

男は目をうっすらと細め、「…手遅れだった」と意味深に呟くといなや、ブルトンパブ『山荒し』をこれまたうさんくさそうにでていった。

この謎の音楽家とわずかに擦れ違いに鋼鉄製のトランクケースを右手にもった、威圧感ある中年紳士がヤドリギとともに扉の鐘をカランッと鳴らして、店のカウンターの左席にすわった。二人はバーテンにハイボールを頼み、何やらボソボソと喋りはじめた。紳士はジジ亭の主に「毎日ブルトン新聞」のある記事を声にだして読んだ。

『ポニーからロドへ、正義の鐘は誰がために鳴る』

愛するブルターニュの民衆よ。
新しい王は我らの敵、世を欺く者だ。
黒伯爵、黒子爵、黒男爵は諸君の仲間だ。

私は真実のために、正義を貫く。

悪を打ち砕くための聖なる力は、
旅立ちの都に懐かしき友とともにある。

我とわが友よ、ロアゾンとともにあれ。

ヤドリギは困惑した表情で紳士に聞いた。
「捜査官殿、このちんぷんかんな記事がどうかしたですかい？」
「これはサンチョ・ボブスリーの部屋にあった紙切れだ」
このちんぷんかんぷんな記事は、今ブルトンの世を騒がしているあの脱獄囚のものだ。脱獄不可能の孤島の大監獄モン・サン・ミシェルからの脱獄に成功した、死刑囚サンチョ・ボブスリー。『迷いの森の特別捜査官』たちが夜通しで彼を追っているなか、男は見事に今も逃げきっていた。結果、先ほど公爵の勅命によって当局より賞金がかけられたとのことだ。
「変装しているようだが、すでに目星はついている」

――長年培われた捜査官の感というものだろうか、さすがだ。

「どうしてヤツがカンペールにいると？」
「私の目は節穴ではない」
「…先ほどすれ違った男がそうとでも？」
ヤドリギはまわりをみまわし、さらに捜査官に小声で訊いた。
「パパティーノにそう聞けといわれたのか？」
鋭い、さすが『迷いの森の特別捜査主任』だけはある。
その男の名がでると、ジジ亭の亭主は黙りこくった。
「……　……　……」
何も喋らない。まるで巨顔（モアイ）石像のようだ。山荒しの主人は二人のまえに、ハイボールを置くと蓄音機に手をかけた。微妙な間を音楽でごまかすかのように。
「サンチョ・ボブスリーはニト夫妻暗殺の主犯格だ」と迷いの森の捜査官。脱獄囚に同情の余地はない。もはや生かすも殺すも軍警察の管轄内にいる。賞金首になった今、奴に命の保証はなく九年前の

仇討ちにはもってこいだ、と唸る。

「賞金を賭けてくださった公爵陛下に感謝しなきゃならんな、アイツは殺されても文句はいえない…」

ホワイト次官は冷たい眼差しで冷笑した。

「で、殺っちまうんですかい？」

異様な殺気、血生臭さというべきものを感じたらしい。

ホワイト次官には、軍警察捜査員としての守秘義務がある。

株式会社である非公式な政府「ブルトン政府」に、警察はおろか軍隊はしない。だがそれに準ずる組織はある。それが軍警察だ。軍警察とは警察と軍隊の組織を合わせもつ、ブルトン政府唯一の武装組織なのだが、フランス国内では彼らの立ち位置はただの警備組織にすぎない。悪くいえば秘密結社（マフィア）ともいえる。

ブルターニュ地方において、この警備組織は絶対であり、フランス政府も黙認しているのが現状だ。なんせ軍警察は魔法が使えるだけでなく、ブルターニュ地方の治安権限を彼らに委譲することで、フランス政府の国庫には公爵家から毎年莫大な委託金がはいる。さらに委託業務によって人件費などを抑えることができ、フランス政府にとって、いい意味での鴨なのだ。

貴族たちによって組織された「軍警察」は、ブルトン公爵家の勅命のみに従う。ゆえに公爵家への忠誠心は並々ならぬものがある。迷いの森の特別捜査官というのは、特に極悪事件を担う精鋭中の精鋭をかき集めた軍警察のエリート部門である。ホワイト氏はそのＮｏ２なのだ。

その一種のエリートであるホワイト次官の容姿といえば、年はエンガチョと同じぐらいか。獲物を狩る獅子のような目が特徴だ。肌を青白く鼻は高い。頭髪は金髪に白髪交じり。髪型はオールバックだ、香料のポマードが鼻にツンとくる。とても姿勢がよくエンガチ

ョよりも背は低いものの、いかにも運動神経は彼よりもすぐれているだろう。誇りの高そうな威嚇をした歩き方をする。
型押しのフロックコートに灰色のビジネススーツ。左手には機械仕掛けのダイヤが埋め込まれた腕時計をしている。靴とベルトは蛇革だ。プラチナ製のベルトのバックルとカフスボタンそしてネクタイピンの装飾は、バッファローをかたどったものだ。そして例の重たそうな鋼鉄のトランクケース。近寄りがたい何かを感じる。

「酒の肴にすぎん、忘れろ」ホワイトはハイボールをほどよく飲んだ。
また再びカウンターのゴシック電話がジリリリーッ、とやかましい音をたてる。

あの魔女ダ・カーポからの電話とあって、ニコレット氏はホワイトのほうをチラリッ。捜査官次官はめんどくさそうに「あの魔女のヒステリー声は耳が痛くてかなわん」と、町一番の変わり者の声を聞くためにカウンター席をたった。
考古学者は先ほど、大祖父トモロヲ・ブドリから伝言を預かったという。その伝言の内容が信じられない内容だったので、ホワイト捜査官は彼女の言葉を四回目も聞き直してしまったほどだ。
「もしもしホワイト次官、知っていますの？」
「何も知りたくないね」男はぶっきらぼうにいった。
人が他人を嫌って、その存在を認めたくないとき、その存在を見る人の瞳というものは恐ろしいほど冷たくなる。それはブルトン人も変わらない。だけどこの世に生まれて独りぼっちということは絶対にない。
「もうすぐ十三歳よ、もしもし聞いていますの？」と魔女。
「フンッ、それがどうした？」
冷たく受け答えをするホワイト捜査官。
「あの子もブルトンの社交界を知ってもいい年頃よッ！」と魔女の

声に不満が燻る。
返答に困るホワイト次官は、飲みかけのグラスに目をやった。
思えば九年前、サンチョ・ボブスリーに殺された、ナオキ・ニト夫妻は自分のかけがえのない親友の一人だった。氏は親友として少女のその後を見届ける義務がある。これは夫婦の遺言に近い頼みなのだ。
ニト夫妻が殺されたあと、その遺児ナオミはトモロヲ・ブドリによって保護された。その後の彼女の消息は不明だった。何年間たってもホワイト次官の上司トモロヲ・ブドリは、捜査官にナオミの居場所を何も教えなかった。ホワイト捜査官がナオミのことを知ったのは、つい数時間前のことだ。
トモロヲ・ブドリから彼女がカンペールのジジ亭でヤドリギ夫妻のもとで働いていると聞いたとき、ナオミはこれからもずっとフランス人として、これからも生きていくのだろう。これがあの人の意志だと自分はふんだという。

「アッパータウンには、あの子を迎えてくれる仲間がいますわ、もしもし」と魔女ダカーポ。
あの子がブルトン人にもどるのが正しいのか、間違っているのか、おそらくその答えはアッパータウンにあるのだろう。ナオミがアッパータウンに行こうが行くまいが、自分はサンチョ逮捕に全力を尽くすだけだ、それがわが友への弔いだ。と男は冷静に言葉を選ぶ。
「あの子の未来は、運命の女神が決めることだ」
捜査官は勢いよく魔女からの電話をきった。意味深な言葉だ。
カウンター席に腹立だしそうにもどるや、男は運命の女神とやらの板挟みを呪うように店一番の度数が高いブランデーを頼み、直で喉に流しいれた。その仕草は喉を潤すというよりもやけ酒といったほうがよい。大人はときにそういうことを仕出かす生き物だ。原点

は子ども時代の一気飲みだろう。誰が教えたのか、きっと酒の神バッカスなのかもしれない。

耳を澄ませばサンコランタン教会の鐘の音が聞こえてくる。

午後八時を過ぎたカンペールの町は冷気のヴェールに包まれている。「山荒し」の窓には、ちらちらと粉雪が舞い降りてきた。この降り方だと明日は黒瓦のトタン屋根に積もった雪下ろしが大変だろう。足元に寒さを感じたニコレット氏は、薪ストーブの火力を静かに強めた。

第7話　ブルトンの騎士候補生【1】

第7話

――午後九時。

ジジ亭では町の名士たちでにぎわっていた。

暖炉の間の廊下を挟んだ真向かいの大部屋が、本日の晩餐会の会場なのだ。大広間からはオルガン演奏の軽やかな音律が響く。次々にジジ亭の赤茶色の扉を開き、ドアベルとお歴歴の挨拶が聞こえる。仮面をかぶったヤドリギ夫人のお世辞が気持ち悪い。冬のカンペールのなかにあって、遠くから眺めてもその華やかさは町一番だ。

大部屋は、ここが安宿のジジ亭であることを忘れさせるほどの豪華絢爛たる内装だ。鍍金のドアノブが設置されているマホガニーの黒扉を開ける。すぐ奥には赤煉瓦製の暖炉が控え、天井には巨大なシャンデリアが二つ。キラキラと目ばゆいが、暖かい光が招待客を包む。

そこには縦に長方形の食卓が四卓ある。舞踏会のために大きい正方形の空間を開け左右に二卓ずつに分かれている。食卓には金銀で刺繍されたテーブルクロスにより純白に飾られている。そしてその上には食卓用のオイルランプ、陶器にいけた深紅の薔薇の花々とともに絵付けの陶器の丸皿。スープ皿にワイングラス。銀食器に銀製のナイフとフォークだ。青銅と木製によって構成されている肘掛け椅子が百脚、各食卓の左右に二五脚づつ置かれている。

絨毯はベルギー製に、背丈が１８０センチほどのホールクロックが扉から向かって左奥に置かれている。細長い振り子がオシャレだ。反対の右側には、足踏みオルガンが居座っている。オーク製で深い

茶色をした音楽装置だ。空気を送り出す踏み板は濃藍色だ。象牙で作られた鍵盤がモノクロの対比が非常に美しい。透かし彫りがオルガンの正面と側面に施されオルガンが高級品であることは一目瞭然。奏者用の赤い丸椅子が目に映える。

さて例の黒ずくめの男は、音楽家ゆえにジジ亭の主人に急遽、演奏を頼まれて本日の晩餐会に特別に招待されていた。大広間から聞こえる軽やかな音律は、彼によるものである。現在この音楽家は右隅にある足踏みオルガンの鍵盤と目下、戦いの最中だ。鍵盤を弾きながら彼は物思いにふけっていた。白い鍵盤は様々な光で反射し混沌としている。お歴々は男性と女性が腰に手を回し楽しく踊っている。

曲名はショパンの「小犬のワルツ」だ。

音楽家がこの地に足を踏みいれることになった、ある星読みの言葉を――ブルトン社会では、占星術士つまり占い師のことを古よりそのように呼称している。曲を弾きながら楽譜のなかに思い浮かべていた。

「だがヒトは違う。運命を変えるために行動することができる――」

ある星読みの言葉を詩人のように復唱する音楽家。

――運命の女神に戦いを挑み、自分は見事に敗れた？

舞踏会の伴奏が終わったらしく黒き紳士に拍手が鳴り響く。

オルガンの蓋を静かに閉め男は人を避けているらしく、軽く一礼をし二階へあがろうと立ち上がっていた。ナオミはブルターニュワインをすすめようと深刻な顔をした音楽家に近づく。名士たちへの振るまいにおかみは忙しく、ナオミがぼんやりとしているものなら「さっさと給仕をしないか！」とフィンガーボールを手渡し足をおもくそ踏み付ける。

晩餐会のために少女の服装は、朝の服装に比べて小奇麗だ。
白いサテンのエプロンに、ベージュの絹のブラウス。赤い絹のスカートとスカーフ。テカテカに茶色の靴も磨かれている。あとで聞いた話だがヤドリギ夫人が美容院に行った際に、そこの奥さんの娘の服を一日だけ借りてきたそうだ。あの汚らしい姿で町の名士に給仕はさすがに出来まい。見栄っ張りのヤドリギ氏の意地がそうさせる。

ジェラールは台座が赤い布で覆われた奏者椅子に座り直すと、「女将、働かせすぎじゃないかね？」
とヤドリギ夫人にふりむいた。
男の言葉遣いにはみすぼらしい服装のなかにも、紳士らしさがかいまみえる。夫人は児童労働をさせているかのように思われたことがよっぽど悔しく「何もしないぐうたらを食べさせるわけにはいかない」と言い放った。
「お客様とは違って、このあとあの子にはチーズづくりのための乳搾りがありますの！」
その顔つきは、よそ者がうちの経営に口を出すなという得意げな顔だ。確かに少女には近くの契約している酪農家に泊り込みで月に数回、牛の乳搾りの仕事がある。だがそれは早朝であって夜の仕事ではない。

女将の不快な顔に少女の皸（あかぎれ）だらけの手をみて男は静かに唸った。
「おたくの『夜の乳搾り』のチーズはいくらの値で売れるのかね？」
うっとしい男だ、ふっかけてやれ！
「二十フラン！」と自信満々胸を張って答えた。これでこの刺青男もぐうの音も出まいと女将。
「よろしい、では百フランで買いましょう」とすかさず言い返した。
女将のどや顔がひきつった。

この言葉に前夜祭に招かれていた、ハレルヤ坊やの個人教授をしている家庭教師のピックル・タナカは思わず目を点にした――――変てこな客だな、ここのチーズは本当は二フランだぞ。皆の視線をあびるなか男は百フラン札を山羊革の札入れからとりだし、ちかくの食卓の皿の下にそっといれた。そしてナオミを優しくみつめた。

「これで君は自由だ、ほんの数時間だけだが…」

どうやら男が買ったものはチーズではなく、彼女の時間だったようだ。

まわりにいた町の名士と淑女は、その行為に心打たれたのか拍手喝采を、この音楽家に贈る。

「ブラボー」

「英雄に乾杯！」

褒め言葉が大広間に鳴り響いた。乙女たちは「まるでサンタクロースみたいね」と囁く。

ジジ亭の亭主は（この男、何者だろう？）と目を細めて、豚のような顔つきで用心深くながめていた。女将は返す言葉がなく、自分の考えをまっこうから否定された人間が体験する、あの感覚におちていた。唇を噛みしめ、その顔つきにはゾッとする憎しみが感じられた。

ナオミは休んでよいか、恐るおそる夫人に訊いた。

「フンッ！」女将の鼻の穴がいつもより二倍ふくらんだ。

「あ、ありがとうございます」

ナオミは女将のほうをむかって、心はジェラールにいった。

ヤドリギ氏は名士たちの会話にまじりながらも、目だけは音楽家ルレスエロ・ジェラールを凝視、女将はそんな彼にそっと耳打ちした。

「ねえ、あの刺青男、何者かねえ？」

「フンッ！」と女将と同じように亭主も鼻を鳴らすと「わしが思うにだな、世間知らずの若造か…」さらにもったいぶって「暇つぶしの音楽家だな。だが金はもっている。いいか、どんどん酒を飲ませろ」とジジ亭の亭主は金持ちに対する、この旅籠の掟を教えてやろうと囁いた。

「先生（マエストロ）、一曲弾いてもらえませんか？」

静かに落ち着いた声色だ。男に声をかけてきたのはピックル・タナカだった。

「失礼ながら、先程の舞踏曲が素晴らしかったので、女将さんからあなたのこと伺いました。まさかあなたがルレスエロ・ジェラール先生だったとは…」と興味深く、黒い男を凝視している。

「以下にも」

と、タナカの視線を避けながら受け流す音楽家。

「ではやはり、あの近代ブルトン音楽の巨匠と――――」

家庭教師は喜びを隠せないようだ。

「今じゃ誰も知らない、しがないオルガン奏者だよ」と物静かに彼の言葉を制した。

「ですがルレスエロ・ジェラール先生といえば…」

ピックル・タナカは音楽の愛好家らしい。執拗に絡んでくる。

タナカという苗字から判断して彼は日系ブルトン人だろう。

いや正式には日系フランス人のほうが正しい。髪型はマッシュルーム状に絞り両耳が隠れている、前髪をだらんと垂れ流し表情が良くわからない。簡単に言えば色白の目の青い日本人だ。挙動不審の目の動きが不気味。

彼の服装は、いたって素朴だ。濃紺の三つボタンの紳士服にネクタイをしておらず、赤のストライプのはいったワイシャツ。右手には純銀製のハイエナを模った腕輪をしている。背は猫背で背丈一六五センチぐらいの細身だ。いやガリガリといった方が無難なのかも

しれない。年齢は三十代といったところだろう。蛇革のベルトに革靴が奇妙だ。コートは晩餐会が始まる前に、受付カウンターで女将が預かっているため見当たらない。どこか売れない芸術家の哀愁が香る。

タナカがあまりにもせがむので、黒き音楽家はガタッと席を座り直し襟を正した。音楽家はフーッと一息かけたあと、オルガンの蓋をふたたび開くと勢いよく、ダダダ、ダーンッと弾きはじめた。最初はベートーヴェンの『運命』を弾き、すぐに美しいバラードへと曲目はうつり、数分後に会場はまた拍手喝采となった。さすがかつて有名な音楽家だっただけはある。

「先生、今の曲名は？」

タナカは聞いたことのない曲みたいらしくその曲名を知りたいらしい。

「ロホルトへのソナタ、私の人生の師が作曲したバラードだ」

愛想もなく、これで気がすんだろう――――と男は腹が減ったのか、空いている席に座った。

まだナオミは男が奏でた、美しいメロディの虜になっているかのようだ。少女は夢心地でそっと深々と雪降る、窓の外をぼんやりと眺めていた。するとフロックコートを深く着た、いかめしい顔つきの男が部屋のなかを鋭く凝視しており、少女は思わずギョッとよろめいた。獣に睨まれたようだった。

――もう一度、窓い目をやれば、もうそこには誰もいない。

疲れから幻影を見たのだろうか。いやそんなはずはない。確かについ先ほどまで窓の外で誰かが、この部屋を覗いていた。そんな少女におかみは悪態をつき、ジェラールは「疲れているんだろう」と

少女を守った。
女将は男のテーブルまでくると、腰をおろした。
「…ねえ、ジェラール大先生…」
気持ち悪い。猫なで声だ。
少女は怪訝な顔つきになった。女将は音楽家が有名人と知り、態度をがらりと変えた。
黒紳士はブルターニュワインを飲むのを一瞬ためらった。
「その…いやねえ、私だってあの子に幻をみさせるほど、せかせか働かさせているわけじゃありませんわ。でもねえ、野良はハレルヤとは身分が違いますの」
女将は自分の面子をたもつだけで精一杯だ。
「身分が違うとは？」
男はナオミにチラッと目をやった。
「あの子は孤児（みなしご）なんですの、おわかりになりまして？」
暖炉近くの名士たちは酔いがまわり、楽しい気分になっていた。
男はただ黙ってワインを一口飲み、さりげなく窓の外に目をやった。
するとナオミと同じように男もギョッとよろめいた。女将もつられて窓の外に目をやったが、窓の外はクリスマスの前夜祭にふさわしい雪降る夜だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5367v/

ブルトンの騎士候補生

2011年11月27日01時06分発行